

北海道大学ルサカオフィス開所式を挙行

お知らせ

・「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」利用のご案内



1 グローバルな大学を目指して

■ 全学ニュース

- 2 北海道大学ルサカオフィス開所式を挙
- 3 薬学研究院 松田 彰教授がJohn A. Montgomery Awardを受賞
- 3 公益財団法人北海道大学クラーク記念財団への寄附
- 4 平成24年度教員免許状更新講習を開催
- 5 平成24年度北海道大学オープンキャンパスを開催
- 6 本学名誉教授が札幌キャンパスで中高生を対象に「サイエンスツアー」を実施
- 7 札幌キャンパスを駆け抜ける -2012北海道マラソン-
- 8 北大フロンティア基金
- 9 産業医兼安全衛生委員巡視を実施(札幌キャンパス)
- 10 サイエンスカフェに産学連携本部 木曾良信TLO部門長がゲストとして出演
- 10 北洋銀行「ものづくりテクノフェア」に参加
- 11 中国・清華大学経済交流訪問団が来学
- 12 日本語教授法ワークショップ開催
- 13 留学生センター日本語研修コース修了式並びに同コース、日本語・日本文化研修コース(日研コース)及び北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)合同修了祝賀会を開催

■ 部局ニュース

- 14 電子科学研究所にて新生「ニコイメーキングセンター」開所記念式典を挙
- 15 スラブ研究センターがグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」による稚内・サハリンセミナーを開催
- 16 スラブ研究センターで第3回サマースクール・プログラムを開催
- 17 農学研究院で市民公開シンポジウム「農学・食料科学が創る安全・安心な社会-人類生存基盤のための科学・技術-」を開催
- 18 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「東アジアのなかの北海道」が終了
- 18 情報法政策学研究センターでサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題-特許法をめぐって-」を開催
- 19 公共政策大学院が地方議員向けサマースクールを開催-地方議会改革をテーマに-



ルサカオフィス開所式



教員免許状更新講習

- 20 経済学研究科 地域経済・経営ネットワーク研究センターが、公開ワークショップ「制度生態系アプローチによる経済政策論の展開」を共催
- 21 獣医学部で北大畜大共同獣医学課程・夏期集中授業「農畜産演習」「帯広基礎獣医学演習」を実施
- 22 水産科学院で第2回国際サマーコースを開催
- 23 ダイナミックな野外研究を満喫! 北方生物圏フィールド科学センターで「野外シンポジウム2012 ~森をしらべる~」を開催
- 24 ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~ 北方生物圏フィールド科学センターで「北海道の魚, まるごとリサーチ!」を開催
- 25 総合博物館で学生発案型・夏休みイベントを開催
- 26 総合博物館でバラタクソノミスト養成講座を開催

■ 寄稿

- 27 民間企業派遣研修報告
株式会社電通における研修を終えて

■ お知らせ

- 28 「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」利用のご案内

■ 同窓会との交流

- 30 愛媛エルム会 第4回総会・懇親会

■ レクリエーション

- 30 平成24年度学内バレーボール大会の開催
- 32 教職員テニス大会の開催

■ 諸会議の開催状況 33

■ 学内規程 33

■ 表敬訪問 34

■ 人事 35

- 36 新任理事紹介
- 36 新任教授紹介



産業医兼安全衛生委員巡視

獣医学部
北大畜大共同獣医学課程・集中授業北方生物圏フィールド科学センター
「野外シンポジウム2012 ~森をしらべる~」

表紙：学生発案型イベント「夏休み企画! ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO! GO!」(2012.8.4・5)

裏表紙：北の息吹[®] リシリリンドウ (*Gentianella jamesii*)

グローバルな大学を目指して

北海道大学総長 佐伯 浩



現在、我が国の大学は、さらなる国際化が求められています。多くの留学生を迎え入れるだけではなく、本学の学生も積極的に海外の大学へ学びに行くことによって初めて国際化と言えます。国際化を進めるためには、留学生にも本学が魅力的であることをアピールし、また本学の学生にも海外で勉学を志したいと思える環境を整備しなければなりません。そして、世界各国から留学してきた学生と我が国の学生が、勉学や交流を通じて互いの文化や習慣の違いを肌で感じ、異文化を理解し合うような状況を創り出すことが肝要です。特に、我が国の失われた20年ともいわれている経済状況と先の読めない不透明さから脱するためにも、国際的に通用する人材の養成が、大学の役割として社会から大きく期待されていることは皆様もご承知のことと思います。

第1期中期目標を検討の際、他の有力総合大学に較べて、本学の留学生数が少ないことが課題としてあげられました。当時は留学生数が、大学の国際化のバロメーターの一つとみられていました。本学の留学生数は700名程度で、他の有力大学の半分から3分の1程度でありました。第1期中期目標期間に入り、本学外国人留学生の出身国で多数を占める中国、韓国を中心に大学間交流協定を積極的に締結するとともに、本学の知名度を国際的に高める新たな取り組みを開始しました。その取り組みの一つが、海外拠点としての本学海外オフィスの設置であります。その目的は、本学への留学の広報等を行い、海外の諸大学との留学生及び研究者の交流促進であります。またそのための情報収集を行っています。2006年、最初のオフィスを北京に設置しました。その後2011年ソウルオフィス、2012年ヘルシンキオフィスとアフリカ、ザンビア共和国にルサカオフィスを設置し、現在4つの海外オフィスが本学の海外広報活動等を実施しており、留学生数も1,400名に達しようとしています。皆様方の出張等の折には是非海外オフィスにもお立ち寄り願えればと思います。

2002年のヨハネスブルグ・サミットで日本国政府とNGOの提案に基づき、2005年からの10年間を「持続可能な開発のための教育の10年」とする決議が、その年の国連総会で採決されました。それに基づき、文部科学省から大学の「国際戦略本部強化事業」が公募され、本学提案の「持続可能な開発」国際戦略本部が、2005年度から2009年度までの5年間の事業として認められました。その活動の内容は、海外の大学や研究機関との教育研究のネットワーク形成、人材育成を通じた国際協力、教育や研究の成果を共有し、その成果を議論する場の設定、それに持続可能な開発の教育を促進させる政策提言となっていました。それらの具体的活動として、2007年から始められ、国際的認知も高まっている「サステナビリティ・ウィーク」があります。

また、アジア太平洋地域の持続可能な発展のための教育コンソーシアムProSPER. Netでは、2008年の発足時から中心メンバーとなり、現在、議長大学を務めています。これらの活動は現在、国際本部が担当しています。また、2008年7月に北海道洞爺湖で開催されたG8サミット開催時に、札幌で、世界35の主要大学機関が集まる大学サミットを開催し、『札幌サステナビリティ宣言』をまとめ、当時の福田康夫首相に手交しました。

大学としてのこのような国際活動に加えて、部局における「南極大学」など国際教育コンソーシアムでの活動や、2008年に設立されたサステナビリティ学教育研究センターの活動、サステナブルキャンパス推進本部の設置、それに国際的な枠組みの中での協同研究への参加は、本学の国際的な認知度を高めることになっています。また同時に、個々の教員の方々にとりましては、教育研究の成果を国際的な場で積極的に発表していくことも重要です。

これまでに述べた国際的な視点をもった活動が、教職員や学生諸君の意識を変え、本学の国際化を加速することに繋がると考えております。皆様方のご協力を期待します。

■全学ニュース

北海道大学ルサカオフィス開所式を挙



出席者での記念撮影



挨拶する佐伯総長

8月28日(火)、北海道大学ルサカオフィス開所式をザンビア共和国ルサカ市のザンビア大学内で行いました。

本オフィスは、ザンビア共和国及びその周辺国からの留学生受入れ、同地域との共同教育・研究及び学生交流を更に促進するため、その活動のベースとして、本年4月1日に設置されたものです。

開所式には、佐伯 浩総長をはじめとする計21名の本学関係者と、ザンビア共和国教育・科学・職業訓練省、在ザンビア日本国大使館、国際協力機構ザンビア事務所、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターをはじめ、ザンビア周辺国の在ザンビア大使館、学術関係機関など約100名の出席があり、佐伯総長及びスティーブン・シムカンガ ザンビア大学副学長の挨拶の後、奥村正裕ルサカオフィス所長から本学及びルサカオフィスについての紹介がありました。その後、江川明夫在ザンビア特命全権大使、ジョン・ピリ ザンビア共和国教育・科学・職業訓練大臣から祝辞をいただき、また、板東久美子文部科学省高等教育局長からの文書による祝辞を本学が代読しました。式の途中には、ザンビアの伝統的な楽器による演奏と踊りが行われるなど、華やかな開所式となりました。

開所式の後は、ルサカオフィス前でテープカット及び看板の除幕式を行うとともに、オフィスの内覧会が行われました。

昼食を挟み、午後からは、主としてザンビア大学の学生、教職員を対象として本学の説明会を実施しました。

説明会では、本学の部局等の紹介に先立ち、奥西 潤在ザンビア大使館二等書記官より、日本の国費留学制度についての説明をいただいた後、本学の笠原正典医学研究科副研究科長、船水尚行工学研究院教授、宮永喜一情報科学研究科副研究科長、伊藤茂男獣医学研究科長、久保川厚地球環境科学研究科副研究科長がそれぞれ部局紹介を行い、最後に、本学の獣医学研究科に留学経験のある、アーロン・ムウイネザンビア大学獣医学部長から、本学に留学した際の体験談について講話がありました。出席したザンビアの学生、教職員の方々は皆熱心に耳を傾けるとともに、様々な質問が寄せられました。

今後は、本オフィスの活動を通じて、ザンビア及びその周辺国における教育・研究機関等との連携拡大、教員や学生の相互交流の促進、卒業生ネットワークの構築を行い、学術面にとどまらない幅広い面での交流を強化していきます。

(国際本部国際連携課)



ルサカオフィス前でのテープカット
(左から佐伯総長、ジョン・ピリ大臣、シムカンガザンビア大学副学長、江川在ザンビア特命全権大使)



ザンビア伝統楽器の演奏と踊り

薬学研究院 松田 彰教授がJohn A. Montgomery Awardを受賞



講演会場の様子



受賞記念の盾

薬学研究院 松田 彰教授が2012年の John A. Montgomery Award を受賞し、贈呈式と受賞講演が20th International Round Table on Nucleosides, Nucleotides & Nucleic Acids会期中の8月8日(水)にカナダ・モントリオール市の Centre Mont-Royal で行われました。

Montgomery Award はヌクレオシドによるウイルスやがんの化学療法に功績のあった研究者に対して贈呈され

る賞であり、日本人では松田教授が初めての受賞者となりました。今回の受賞は松田教授がかねてより研究されていた糖部修飾型シトシンヌクレオシドアナログの抗がん作用に関する研究に対して与えられたものです。

受賞講演で松田教授は、「Development of Sugar-modified Cytosine Nucleosides as Antitumor Agents - Old Stories for Future Success -」と題し、どのよう

に薬をデザイン・合成したかを説明しました。さらにその薬の抗がん作用のデータから作用発現のメカニズムを推定し、次の薬へとデザインを展開していった過程を丁寧に説明し、世界各国からの大勢の聴衆は熱心に耳を傾けていました。

(薬学研究院・薬学部)

公益財団法人北海道大学クラーク記念財団への寄附

このたび、公益財団法人北海道大学クラーク記念財団から、本年3月末をもって退職された方々から161万円のご寄附を賜った旨ご報告がありましたので、謹んでお知らせいたします。

同財団につきましては、毎年、本学の教育・研究及び学生支援のため、多額の助成事業を実施していただいております。本学といたしましても、このたびのご厚志に対しあらためて感謝申し上げます。

なお、ご芳名の掲載につきましては、ご本人の同意を得ておりますことを申し添えさせていただきます。

(総務企画部総務課)

寄附者のご芳名(18名)(平成24年8月31日現在、敬称略)

鐘 邦芳, 阿部哲夫, 笠原 茂, 喜田 宏, 鬼柳善明, 倉前正志, 小柴正則, 佐藤正知, 菅原一幸, 杉山敏保, 高井潔司, 田中康雄, 所 伸一, 野坂政司, 林実樹廣, 藤井教公, 吉田克己, 吉水 守

平成24年度教員免許状更新講習を開催

7月25日（水）から8月26日（日）にかけて、今年度の教員免許状更新講習を開催しました。

現在教員免許を持っている現職教員等は、10年毎に設定される修了確認期限前の2年間に大学などが開設する30時間の教員免許状更新講習を受講（必修領域においては12時間、選択領域においては18時間の受講）及び修了し、免許管理者（都道府県教育委員会）に申請する必要があります。本講習制度は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能を身に付けることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち社会の尊敬と信頼を得ることを目指すために、平成21年4月1日に導入されました。

平成21年度以降、本学では毎年講習を実施しており、今年度も様々な学校種の教員等を対象として、全8講習を開催しました。受講者の夏休み期間を中心に開催したことやバラエティに富んだ内容の講習を開設したこともあり、必修領域の受講者数は129名、選択領域の受講者数は7講習あわせて284名の方々の参加がありました。また、今年度は、練習船による水産科学実習を函館周辺海域のほか、宮城県沖合海域でも開講し、3日間の乗船実習を受講者全員無事に修了しました。

講習では、担当講師からのオリエン



「南紀熊野における森林科学実習」の様子

テーションの後、各テーマに関する講義や実習が行われ、講習のまとめとして修了認定試験を行いました。講習後に寄せられたアンケートでは、「丁寧な資料とわかりやすい講義内容で興味深く受講できた」、「豊富な資料とわかりやすい説明で時間があつという間だった。専門分野の先生のお話を聞くことができ、自分とは別の視点を発見することができとても参考になった」などの意見があったほか、実習を主とする講習の受講者からは「目で見て、実際体験することの重要性を改めて感

じることができた」、「授業の題材として、明日からでも活用できる実習だった」、「来年講習を受ける同僚がいれば是非勧めたい講習だった」などの意見が多数寄せられ、本講習の意義を改めて感じる良い機会となりました。

なお、今年度開催した講習は以下のとおりです。受講者の皆様、大変お疲れ様でした。

（学務部教務課）

今年度開催した講習

| 領域 | 講習名 | 開設日 | 講習時間 | 定員 | 受講者数 |
|----|-------------------|-----------------|------|------|------|
| 必修 | 教育の今日的諸課題とその改革の方途 | 8月13日(月)・14日(火) | 12時間 | 130名 | 129名 |
| 選択 | 南紀熊野における森林科学実習 | 7月25日(水)～27日(金) | 18時間 | 12名 | 8名 |
| | 「ことば」をめぐる研究とその応用 | 8月4日(土) | 6時間 | 50名 | 47名 |
| | 練習船による水産科学実習 | 8月4日(土)～6日(月) | 18時間 | 10名 | 9名 |
| | 理系の応用技術：工学の世界 | 8月7日(火) | 6時間 | 80名 | 40名 |
| | 現代社会の課題 | 8月10日(金) | 6時間 | 50名 | 50名 |
| | 特別支援教育 | 8月15日(水) | 6時間 | 120名 | 119名 |
| | 練習船による水産科学実習 | 8月24日(金)～26日(日) | 18時間 | 24名 | 11名 |

平成24年度北海道大学オープンキャンパスを開催



会場いっぱいの参加者



理学部「自由参加プログラム」



歯学部「高校生限定プログラム」

8月5日(日)・6日(月)の2日間(水産学部等、一部学部学科プログラムは別日程)、札幌・函館の両キャンパスにおいて、オープンキャンパスを開催しました。

期間中の延べ来場者数は昨年度を691名(約7%)上回る10,439名にのぼり、昨年度に引き続き過去最高を記録しました。

主に初日に開催された「自由参加プログラム」では、高校生だけでなく、多くの保護者や市民の方々が、学部・学科紹介や研究室訪問に参加しました。

また、10学部で開催された「高校生限定プログラム」の実験や体験ゼミ等では、一様に真剣な面持ちで説明に聞

き入る高校生の姿が見られ、大学における学びの一端を味わう貴重な機会となっていました。

(アドミッションセンター)

来場者数

| | 自由参加プログラム | 高校生限定プログラム | 部局等別合計 |
|----------------|-----------|------------|--------|
| 文学部 | 696 | 101 | 797 |
| 教育学部 | 419 | 63 | 482 |
| 法学部 | 747 | | 747 |
| 経済学部 | 486 | 138 | 624 |
| 理学部 | 1,888 | 125 | 2,013 |
| 医学部医学科 | 517 | 88 | 605 |
| 医学部保健学科 | 979 | | 979 |
| 歯学部 | 82 | 32 | 114 |
| 薬学部 | 725 | | 725 |
| 工学部 | 750 | 125 | 875 |
| 農学部 | 662 | 164 | 826 |
| 獣医学部 | 520 | 61 | 581 |
| 水産学部 | 369 | 74 | 443 |
| 大学院環境科学院 | 28 | | 28 |
| 附属図書館(本館・北図書館) | 151 | | 151 |
| 国際本部 | 87 | | 87 |
| アドミッションセンター | 362 | | 362 |
| 総合計(名) | 9,468 | 971 | 10,439 |

本学名誉教授が札幌キャンパスで中高生を対象に「サイエンスツアー」を実施



ローエネルギーハウス見学の様子

石狩及び札幌北部に住む7名の本学名誉教授がサイエンスの楽しさ、奥深さ、そして大切さを地域の方々に伝えるために科学研究者グループ「サイエンスアイ」(代表：名誉教授 前野紀一)を組織しています。同グループは、石狩市を活動拠点に毎月、科学実験室や科学相談室を開催するとともに、年1回大学や研究所を訪問し、最新の研究を見学し実験を体験する「サイエンスツアー」を企画しています。

8月7日(火)、サイエンスアイが本学の施設を活用した「サイエンスツアー」を実施し、支援を行いました。

本学は、中期目標として、大学の教育研究成果を社会に対し積極的に還元することを掲げ、中期計画で高大連携の充実、大学と社会を結びエゾン機能の強化や教育研究成果を多様な方法で社会に向けて発信していくことを計画しています。

また、近年、高校生や中学生の理科離れが顕著であり、将来の科学技術力維持に対し警鐘が鳴らされています。国はその対策に取り組み、当然、大学にもその対応が求められています。

科学研究者グループ「サイエンスアイ」は、自治体と連携しながら高校生や中学生等に科学の楽しさを伝える活

動を行っている団体であり、広報課では同団体の活動は本学の中期目標・中期計画の推進に資するとともに、理科離れ対策にもなると判断し、支援しています。

この度のサイエンスツアーは、中学・高校生を対象に、石狩市教育委員会及び石狩市図書館の共催で実施されました。今回は第6回目であり、参加者は高校生5名、中学生11名及び小学5～6年生5名の合計21名、石狩市教育委員会からも3名が参加し、サイエンスアイのメンバー7名が加わり、総計31名のツアーとなりました。

午前中は低温科学研究所と工学部のローエネルギーハウス(環境社会工学科環境システム工学研究室)を見学し、南極の氷の観察やマイナス50度の体験、あるいは自然エネルギーを高度に活用した生活様式などにツアー参加者から感動の声が上がりました。

昼は工学部学生食堂において、各自大学生になった気分で楽しく昼食を取りました。

午後からは4グループに分かれ、工学部研究室において、「地球環境に貢献する微生物プラスチック(応用化学科バイオ分子研究室)」、「人工知能に



工学部研究室での実験の様子

あなたが理解できるか?(情報エレクトロニクス学科情報認識学研究室)」、「デザイン：構造から感性まで(機械知能工学科インテリジェントデザイン研究室)」及び「体験しよう!土と水の不思議な関係(環境社会工学科水工・水文学研究室)」といった各テーマに関する興味深い実験を行いました。

参加者のアンケート結果によると(21名全員回答)、半数はリピーターであり、次回の参加を希望する者は11名もいました。進路先の質問に対しては、数年前までのアンケートでは「特に決めていない」の回答が大多数でしたが、今回は13名が「大学進学(理系)」を明確に選択するようになりました。スタッフ一同、サイエンスアイの活動がその成果を少しずつ現してきたものと喜んでいます。

最後に、見学や実験等で低温科学研究所、工学研究院の先生・学生及び職員の皆様にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

◆「サイエンスアイ」ホームページ
http://www.geocities.jp/science_iii

(総務企画部広報課)

札幌キャンパスを駆け抜けるー2012北海道マラソンー

2012 北海道マラソンが、8月26日（日）に札幌市内で開催され、男女約1万人のランナーが本学札幌キャンパスを駆け抜けていきました。当日の天候は曇り、午前9時のスタート時点で気温28度、湿度55%（組織委員会発表）と、マラソンには厳しい条件でのレースとなりました。

26回目を迎える本大会の主な変更点としては、大通公園発着のコースとなったことで政令指定都市の中心部を発着とするフルマラソン大会として国内唯一となったこと、昨年より約3時間早い午前9時スタートとなったこと、さらに、過去最多の11,349人のエントリーがあり、大規模市民マラソン大会にスケールアップしたことなどが挙げられます。

2009年大会からコースに加えられた本学の緑あふれる美しいキャンパスには、大勢の市民が駆けつけ、その温かい声援や激励が、ゴールまで残り約2kmの苦しい場面にある選手たちの最後の力走を後押ししました。

ランナーたちは、レース終盤の38km付近から本学構内に入り、北キャンパスから札幌農学校第2農場の側を駆け抜け、メインストリートの緑のト

ンネルを縦断中に40km地点を通過。クラーク像のあるロータリーを左折し、右手に見える緑鮮やかな中央ロンの木陰を通り、札幌農学校時代の正門を移設した南門を出て、北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）を正面に見ながら、ゴールの大通公園を目指してラストスパートをかけていきました。

当日は、学生が結成した「北海道マラソン応援プロジェクト」による応援活動が行われ、今年は「BIG BAND北極」、YOSAKOIソーランサークルの「テスク&祭人」、民謡研究合唱団「わだち」が参加しました。クラーク像前のコーナーに陣取った学生達は、プロジェクト代表が手作りした「ハイタッチ無料」のプラカードなどを掲げながら、趣向を凝らした応援を行って通過するランナーを励ましていました。

コーナーを大回りして学生達とハイタッチする選手や笑顔で手を振って応える選手も多く見られ、ある選手からは「学生たちとのハイタッチ後には元気が出て、ゴールまで一気に駆け抜けることができました」とその応援に感謝する言葉が聞かれました。

（総務企画部広報課）



「札幌農学校第2農場」横を走り抜けるランナー



ハイタッチする学生



学生による応援の演舞



学生による応援

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

| | |
|---|--|
| 北大フロンティア基金情報 基金累計額 （8月31日現在） | / 13,535件 2,511,586,672円 教職員の寄附率 28.9%（1,120件／3,878人） |
|---|--|

8月のご寄附状況

法人等5社、個人57名の方々から3,353,700円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

北見赤十字病院、株式会社コア北海道カンパニー、昭和133年文類入学者有志、学校法人 北海道武蔵女子学園

寄附者ご芳名（個人）

| | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 合川 正幸 | 阿部 孝司 | 石黒 昌道 | 稲垣 浩司 | 上田 敦 | 大城 武久 | 小内 透 | 小原 大和 |
| 金川 眞行 | 金山 真人 | 楠目 祐子 | 工藤 峰生 | 近藤 哲也 | 瀬名波栄潤 | 高橋 光彦 | 武谷 敬之 |
| 土家 琢磨 | 寺澤 陸 | 豊田 威信 | 中司 哲雄 | 野坂 政司 | 林 達也 | 前田 繁利 | 丸川 桂子 |
| 八木澤克則 | 山崎 賢司 | 吉田 広志 | 渡辺 正朋 | | | | |

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

北見赤十字病院、株式会社コア北海道カンパニー、昭和133年文類入学者有志

（個人）

阿部 孝司、武谷 敬之

感謝状の贈呈



高木 聡様（平成24年9月3日）

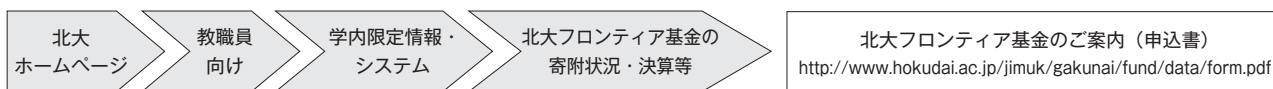


阿部孝司様（平成24年9月11日）

ご寄附のお申し込み方法

①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

産業医兼安全衛生委員巡視を実施（札幌キャンパス）

札幌キャンパス安全衛生委員会では、平成24年度の札幌キャンパス安全衛生管理計画に基づき、8月6日（月）に植物園、8日（水）に理学研究院を対象とし、作業場の作業方法や衛生状態について職場巡視を実施しました。

巡視には産業医及び安全衛生委員会の委員、巡視の対象となった部局等の

衛生管理者が参加し、それぞれ質疑応答と併せて安全主任者や作業担当者に対する指導が行われました。

植物園の巡視においては総括安全衛生管理者である上田一郎理事・副学長も参加し、園内での事故や健康に影響を及ぼす確率が高いと推定される作業場所を実際に確認しました。作業担当

者からの聞き取りでは、ハチ対策のための殺虫剤が周囲の植物に悪影響を及ぼすことから対応が難しいなど、自然と触れ合う場所での安全確保の難しさについて、改めて考えさせられる機会となりました。

また、理学研究院においては、地震対策としての棚の固定や化学薬品の保管方法など、全学的に共通する問題が見受けられました。

なお、産業医巡視は、月1回の実施が法令で定められており、今後も各部署等を順に回る予定です。

（総務企画部総務課安全衛生室）



植物園巡視の様子



実験室内巡視の様子（理学研究院）

サイエンスカフェに産学連携本部 木曾良信TLO部門長が ゲストとして出演

8月1日（水）、北海道と株式会社三省堂書店との連携協定事業の一環として開催されたサイエンスカフェにおいて、産学連携本部の木曾良信TLO部門長・特任教授（元サントリーウェルネス株式会社健康科学研究所長）がゲストとして参加し、『健康大国「ほっかいどう」～体にうれしい北海道の「食」の底力～』をテーマに講演を行いました。

会場となった札幌駅前通地下歩行空間・北3条交差点広場では、事前申し込みのあった参加者のほか、多くの通

行人が足を止め、道産食材の持つ魅力やお酒に関する話に聞き入っていました。参加者からは健康に直結する道産食材の効果的な食べ合わせなど多くの質問が寄せられ、盛況のうちに閉幕となりました。

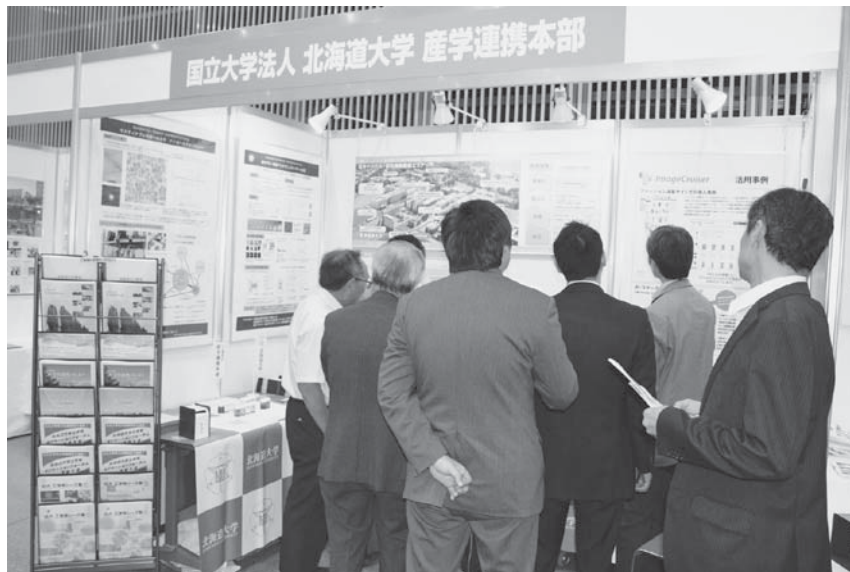
産学連携本部では今後もこうした市民向けの広報活動に加え、地域企業等と密着した技術移転活動を積極的に進めていく予定です。

（産学連携本部）



参加者からの質問に答える木曾TLO部門長(中央)

北洋銀行「ものづくりテクノフェア」に参加



多くの来場者で賑わう本学ブース

8月7日（火）、札幌コンベンションセンターにおいて、北洋銀行主催の「ものづくりテクノフェア」が開催され、本学からは産学連携本部がブースを出展しました。本フェアには、北海道内の企業、研究機関、大学などを中心に道外からも複数の出展があり、主催者の発表によると、昨年を上回る約3,800名が会場を訪れました。

産学連携本部では工学研究院 渡辺精一教授の研究シーズをもとに創業し

たベンチャーや、情報科学研究科の長谷山美紀教授と地域企業の皆様との連携により開発された成果品を紹介しました。当日は、朝から多くの来場者があり、多数のお問い合わせをいただきました。

また、来場された企業から複数の技術相談等もあり、今後も継続した技術移転活動を行っていく予定です。

（産学連携本部）



大型ディスプレイを利用した展示

中国・清華大学経済交流訪問団が来学



訪問団と産学連携本部関係者による記念撮影
(前右から3人目：上田産学連携本部長，4人目：顧前清華大学学長)

8月21日(火)、中国・清華大学の顧秉林前学長ほか清華大学関係者、及び中国企業関係者による経済交流訪問団13名の来学があり、産学連携本部のほか、公益財団法人北海道科学技術総合振興センター(ノーステック財団)及び独立行政法人中小企業基盤整備機構北海道本部(中小機構北海道)を訪問し、北大リサーチ&ビジネスパーク等の活動状況の視察、各施設の見学が行われました。

この訪問は産学官連携に力を入れている清華大学から、総長の表敬訪問と併せて北キャンパスエリアの産学連携に関する取り組みについて視察希望があり、実現したものです。

当日は、初めに中小機構北海道の北海道大学連携型起業家育成施設である北大ビジネス・スプリング、次いで大

学等の研究成果を事業化に向けて支援しているノーステック財団、最後に本学の研究成果による知的財産の創造、保護及び産業界等との連携推進を担う産学連携本部を順に訪問し、研究開発から事業化までを一体的に実施する北キャンパスエリアの各施設の活動内容等について説明が行われました。

産学連携本部の活動内容・実績等については、上田一郎産学連携本部長、山本 強副本部長の同席の下、木曾良信TLO部門長が説明を行い、訪問団からは企業及び研究者と産学連携本部の係わり方に関する質問などがあり、活発な質疑応答・有意義な情報交換を行いました。

(産学連携本部)



中小機構北海道による説明風景

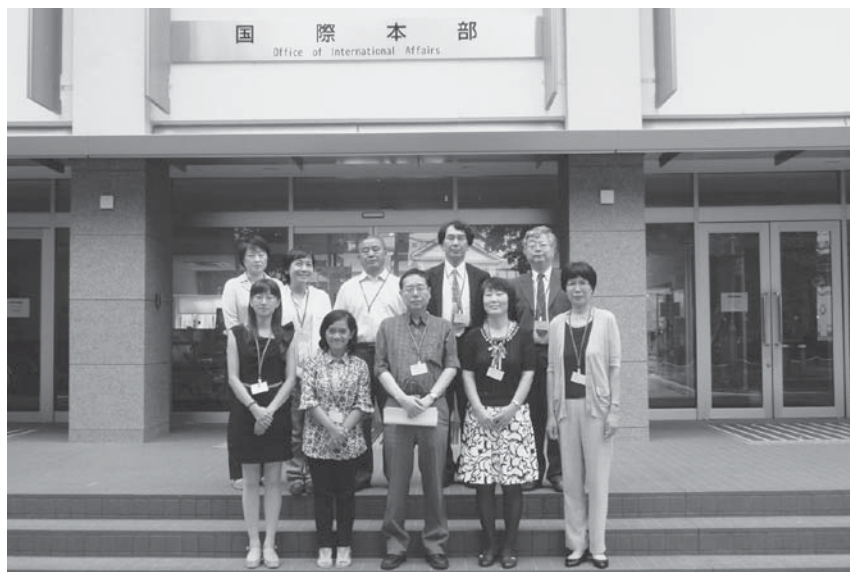


ノーステック財団による説明風景



産学連携本部による説明での質疑応答

日本語教授法ワークショップ開催



国際本部前での集合写真

7月16日（月）から20日（金）までの5日間、国際本部留学生センターにおいて、日本語教授法ワークショップを開催しました。

この催しは、本学と大学間交流協定を締結している協定校で日本語教育に携わっている先生方をお招きし、協定校における日本語教育をより一層充実したものにすることをお手伝いをするとともに、協定校の日本語教員と本学留学生センターの日本語教員の交流を図ることを目的に開催しています。平成20年にスタートした本ワークショップも、本年度で5回目の開催となり、今回は、中国、タイ、そしてインドネシアの協定校より、7名の先生方が参加しました。

初日の開講式では、杉浦秀一留学生センター長から、このワークショップの趣旨説明や歓迎のメッセージがあり

ました。留学生センターの教員及び協定校からの参加者が自己紹介をする際には、各々の指導環境などについての簡単な話もあり、参加者はそれぞれ熱心に聞いていました。その後に行われた交歓会でも、留学生センターの教員と参加者は、互いの経験や状況などの情報交換をしながら親交を深めました。

2日目からのワークショップでは、留学生センターの教員3名による、会話、発音、学生間交流型科目の開発などについての講義や、授業見学が行われました。参加者からは実践的な内容だったので今後の授業に生かしたい、内容が豊富で充実した5日間だった、などの感想を得ました。

また期間中、講義や課外行事を通して、留学生センターの教員と参加者の間で活発な意見交換や情報交換が行われました。また、学内ツアーや市内ツ

アーでは、参加者は本学や近隣の施設、札幌における留学生の住環境などについて熱心に見学し、自身の大学の学生に本学への留学を安心して勧めることができると感じたようです。すでに留学している学生と会い、こちらでの実際の生活・学習環境についてヒアリングされた先生もいました。

最終日の閉講式では、コーディネータの山下好孝留学生センター教授より総括があった後、各参加者に修了証書が手渡されました。各々が今回得たワークショップでの成果を自校に戻って活用したいと述べ、また、互いのこれからの交流を約束して、ワークショップは好評のうちに終了しました。

この催しは来年度以降も引き続き開催していく予定です。

（国際本部国際支援課）



授業見学の様子



学内ツアー（札幌農学校第2農場）

留学生センター日本語研修コース修了式並びに同コース、 日本語・日本文化研修コース（日研コース）及び 北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）合同修了祝賀会を開催



修了式での集合写真（日本語研修コース）

8月10日（金）午後4時30分から、国際本部大会議室において、国際本部留学生センター日本語研修コース研修生の修了式を行いました。

この日本語研修コースは、大使館推薦の外国人留学生に対して大学院進学前の予備教育として開設されている6か月間の研修コースで、今回修了した研修生は、本年4月に入学した8か国からの9名です。10月からは、本学の研究科等で引き続き学ぶことになっています。

修了式では、来賓や指導教員の方々が見守るなか、本堂武夫国際本部長から留学生一人ひとりに修了証書が授与されました。その後、杉浦秀一留学生センター長から、日本語でお祝いの言葉があり、学生が真剣に聞き取ろうとする様子に、杉浦留学生センター長がゆっくりと話して応えるなど、和やかな雰囲気となりました。最後に集合写真を撮影しましたが、その後もしばらく学生たちは、指導教員やこの半年間で親しくなった学生同士で写真撮影を

続けていました。

修了式に引き続き、午後5時から、国際本部大講義室において、同コースのほか、昨年10月に入学した日本語・日本文化研修コース（日研コース）と北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）の合同修了祝賀会を催し、来賓や指導教員の方々も併せて約100名が出席しました。

日研コースは、母国で日本語・日本文化に関する教育を行う学部在籍している留学生に対して日本語、日本文化、日本事情に関する教育を行う1年間の研修コースであり、HUSTEPは、本学の協定校に在籍する学生に対して原則として英語による授業を実施するプログラムです。今回各コースに参加した学生数は、日研生25名、HUSTEP生36名でした。

祝賀会は、杉浦留学生センター長の発声による乾杯で始まり、修了生たちは、学生同士はもちろん、お世話になった先生方とも語らい、楽しい時を過ごしていました。

途中、各コースの代表者が、すっかり上達した日本語のスピーチで日本語の勉強や本学での楽しかった学生生活の思い出などについて語り、祝賀会を盛り上げました。最後に留学生センターのピーター・フィルコラ准教授からねぎらいとお祝いの言葉があり、祝賀会が終了しました。会の終了後も、多くの学生がラウンジに残り、名残惜しそうに歓談し、写真撮影を行っていました。

（国際本部留学生センター）



祝賀会でのHUSTEP学生代表挨拶

■ 部局ニュース

電子科学研究所にて新生「ニコンイメージングセンター」 開所記念式典を挙

電子科学研究所は、株式会社ニコンインステックからの寄附により、平成17年に寄附研究部門「ニコンバイオイメージングセンター」を設置しましたが、昨年9月末をもって、6年間の寄附研究部門としての運営を一旦終了しました。その間、本センターは北海道大学内外の医学、理学、工学、農学、薬学などの極めて幅広い研究領域の研究者にご利用いただき、総利用者数2,600名、総利用時間は約19,000時間に及びました。その後、数多くの利用者から、本センターを継続して運営して欲しいとのご意見を多数いただき、電子科学研究所教授会において鋭意議論を重ねてきた結果、本年度の本研究所改組に伴い、研究支援部ニコンイメージングセンターとして、オープンファシリティー制度や文部科学省「ナノテクノロジープラットフォーム」事業を活用し、本研究所が直接運営することとなりました。

この新生を記念すべく、8月30日（木）に北キャンパス電子科学研究所にて、開所記念式典（記念講演会及び記念祝賀会）を開催しました。

開所記念式典には、協賛企業各社及び学内外の新旧センターの利用者等を中心に、70余名にご出席いただきました。記念講演会は三澤弘明電子科学研究所長の挨拶及び根本知己ニコンイメージングセンター長による新生センターの概要説明から始まりました。引き続き、今村健志愛媛大学大学院医学系研究科教授により、本研究所が参画する「物質・デバイス領域共同研究拠点」講演を兼ねた特別記念講演が行われ、第一線のがん研究者としての立場から、生命科学、基礎医学研究における新生センターやバイオイメージングへの期待と共同研究の拠点としての役割についてお言葉をいただきました。その後、本センター利用者を代表し、高橋正行理学研究院准教授、前田英次

郎工学研究院助教から、本センターを利用した研究成果についての発表がありました。最後に協賛企業を代表し、株式会社ニコンインステック、株式会社オプトライン、中央精機株式会社、浜松ホトニクス株式会社、モレキュラーデバイスジャパン株式会社よりご講演をいただき、笹木敬司本研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター長の挨拶で閉会しました。

その後、引き続き開催された記念祝賀会は三澤所長による挨拶、新田孝彦理事・副学長の祝杯の音頭で始まり、株式会社ニコンインステック 伊藤己喜男代表取締役社長、横河電気株式会社 熊田明俊ライフサイエンスセンター営業部長、株式会社日本ローバー林 亨営業部ジェネラルマネージャーより祝辞をいただき、浜松ホトニクス株式会社 久米俊浩システム営業推進部営業部長による乾杯で閉会しました。

今回の記念講演会及び記念祝賀会では、本研究所研究スタッフはもとより、利用者及び協賛企業各社の交流を深めることができました。本センターへの期待は、イメージングの最新技術の開発、提供という一方向の流れだけではなく、若手研究者を中心とした利用者や、最新機器テクノロジーを提供している協賛企業との相互作用であり、各国のニコンイメージングセンターを含めた重層的なネットワークへの展開であると改めて認識しました。このような真の中核的拠点として、新生センターが発展的な活動を維持することが、本学のみならず、我が国の明日のライフイノベーションや生命科学の振興のための使命であると信じています。皆様の旧センター以来のご協力に感謝いたしますとともに、今後ともご指導ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。

（電子科学研究所）



開所記念講演会場の様子



三澤所長による開会の挨拶



根本センター長によるセンター概要説明



愛媛大学大学院 今村教授による特別講演

スラブ研究センターがグローバルCOEプログラム 「境界研究の拠点形成」による稚内・サハリンセミナーを開催

北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」と、笹川平和財団研究助成「境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN)」の主催による稚内・サハリンセミナーを、“これからの日本とロシアの「境界交流」について考えます”というキャッチフレーズを掲げ、8月26日(日)に稚内で、28日(火)にはロシア・サハリン州ユジノサハリンスク市で開催しました。

このセミナーは実務者と研究者の意見交換の場として、日本の各境界地域の現状と課題について、現地から現地の視点で話し合うというコンセプトがあり、既に与那国、対馬、台湾において開催の実績があります。実務者と研究者が立場を超えて連携することで、境界地域を活性化するための様々なアイデアやプランが生み出されることが期待されています。今回は稚内のみならず、参加者一同がフェリーで宗谷海峡を渡り、対岸のサハリンでもセミナーを開くという意欲的な試みがなされました。

26日(日)の稚内セミナーは、第1部「海の境界をめぐる現状と課題」、第2部「稚内から学ぶ境界交流」と題して、新築された稚内の複合施設T・ジョイ稚内で開催しました。冒頭に外間守吉与那国町長と工藤 広稚内市長による挨拶の後、山田吉彦氏(東海大学)から尖閣諸島をめぐる外交政策についてタイムリーな現状報告があり、自治体の石田和彦氏(小笠原村)・高田俊成氏(竹富町)・久保 実氏(五島市)・西谷榮治氏(利尻町)からの

各報告も山田報告にうまく関連付けた形でなされたため、白熱した質疑応答が行われました。

第2部では佐藤秀志氏(稚内市)・今村光壹氏(稚内商工会議所副会頭)・外間氏(与那国町長)・伊賀敏治氏(対馬市)・加峯隆義氏(九州経済調査協会)からの報告が行われ、南北の境界地域における交流の形を各自治体がそれぞれの課題を抱えつつ模索している現状が詳らかに説明されました。

27日(月)はフェリーでの移動になりました。これはかつて稚泊連絡航路と呼ばれた北方経営の大動脈と全く同じルートです。偶然ながら、今回のスケジュールは旧島民による墓参団「平和の船」と一緒になり、宗谷海峡の洋上では彼らの主催による慰霊祭が挙行されていました。5時間半という短い船旅ではありましたが、一同も海峡で散華した犠牲者に祈りを捧げ、日ソ・日ロ関係に翻弄されてきた海峡の歴史に思いを馳せることになりました。

28日(火)にはユジノサハリンスク市のメガパレスホテル屋上ホールでサハリンセミナーを開催しました。セミナーは第1部「北海道とサハリンとの交流の現状と課題」、第2部「周辺地域における交流と取組」という2部構成で実施されました。

第1部では、日本側から外間氏(与那国町長)、サハリン側からドミトリー・ハン氏(サハリン州政府)の挨拶があったほか、セルゲイ・ベルグヒン氏(国立サハリン総合大学)が観光ビジネスとしての日ロ交流の現状と課題を報告し、サハリン稚内クラブの

会員諸氏が、稚内とサハリン州で続けられている草の根交流の成果を論じました。日本側の参加者も、今村氏(稚内商工会議所副会頭)・渡辺公仁氏(稚内サハリン事務所)・対馬雅弘氏(みちのくカンパニーリミテッド)などが、サハリンとの交流が有する将来性を語りました。

第2部では、財部能成氏(対馬市長)・木村 崇氏(京都大学名誉教授)などが、対馬やボロジノ島(大東島)での日ロ関係史の知られざる側面を語り、サハリン側の強い関心を喚起していました。

初秋のサハリンとは思えないほどの陽光が天窓から降り注ぐ中で、参加者は汗だくになりながらも各報告に聞き入っていました。また、大島 剛氏(有限会社ルテナ)による際だった同時通訳が、参加者の相互理解を大いに深めていたことも特筆すべき点です。

29日(水)・30日(木)にはコルサコフとホルムスクの巡見も行われ、サハリンプロジェクトのLNG(液化天然ガス)コンビナート*や廃墟と化したホルムスクの製紙工場の施設群など、サハリンの歴史と現状をつぶさに見て回る機会もありました。なお、今回のセミナー開催にあたって、稚内市と稚内商工会議所にご尽力を賜りました。

*LNGコンビナート

サハリン北部で採掘した天然ガスを液化して日本などへ搬出するための工場と積出港

(スラブ研究センター)



稚内セミナーの様子



サハリン総合大学 セルゲイ・ベルグヒン氏の報告



コルサコフのフェリーターミナル風景

スラブ研究センターで第3回サマースクール・プログラムを開催



総合博物館前での記念撮影

北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」は、若手研究者の育成・教育と国際化を目的のひとつに掲げており、毎夏、短期集中の英語による教育プログラムを実施しています。第3回目となる本年度は、7月31日（火）から8月7日（火）にわたり、「アジアの境界：中央アジア・東南アジア・日本・韓国」と題した教育プログラムをスラブ研究センターで行いました。

履修者の国籍は、ロシア、カザフスタン、中国、インド、フィンランド、ルーマニア、シンガポール、フランス、日本と9ヶ国に及び、連日、講師との

間で英語による活発な質疑が行われました。特に、日本の境界問題に関し、初日には国境問題、2日目には日本社会内部の境界問題と講義が2日にわたり組みられ、外国から参加した履修者の強い関心を引きました。

本サマースクールを通じて、境界研究ネットワークが海外若手研究者の間にも一層拡充されることとなります。併せて、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が編集する査読誌「Eurasian Border Review」への投稿も期待されます。

（スラブ研究センター）



活発な質疑の様子

サマースクール・プログラム

- 第1日 Japan as a Border Power in Eurasia
- 第2日 Borders inside the Japanese Society
- 第3日 Natural, Political and Social Border in Central Asia
- 第4日 外国人履修者によるワークショップ
- 第5日 市内巡検（北海道開拓記念館、北海道開拓の村見学）
- 第6日 Borders in Southeast Asia
- 第7日 Gender Politics in East Asia: Case Study of South Korea

農学研究院で市民公開シンポジウム「農学・食料科学が創る安全・安心な社会ー人類生存基盤のための科学・技術ー」を開催



パネルディスカッションの様子
(左から：伴戸先生、松井先生、渡部先生、倉田先生、生源寺先生、西澤先生)

8月7日(火)、農学部大講堂において、日本学術会議農学委員会・食料科学委員会及び農学研究院が主催するシンポジウム「農学・食料科学が創る安全・安心な社会ー人類生存基盤のための科学・技術ー」を開催しました。

このシンポジウムは市民公開シンポ

ジウムとして行い、学生・教員はもとより、試験研究機関、行政、農業団体、民間企業、一般市民などから約180名の参加がありました。

当日は、以下の講演とパネルディスカッションが行われ、参加者から活発に質問や意見が出されました。

なお、このシンポジウムのプログラム(講演要旨)をホームページからダウンロードすることができます。

<http://scjfood2012.bpe.agr.hokudai.ac.jp/>

(農学院・農学研究院・農学部)

プログラム

第I部 講演「農学・食料科学が創る安全・安心な社会」

「食料と環境への貢献を目指した作物の創出」

西澤直子(日本学術会議農学委員会委員長、石川県立大学生物資源工学研究所所長)

「あらためてフード・セキュリティを考える」

生源寺真一(日本学術会議第二部副部長、名古屋大学大学院生命学研究科教授)

「生存基盤を守るための食料作物の展開ー今世紀の育種と戦略ー」

倉田のり(日本学術会議会員、情報・システム研究機構国立遺伝学研究所副所長)

「東日本大震災に係る食料問題について」

渡部終五(日本学術会議会員、北里大学海洋生命科学部教授)

「生存基盤としての農学ー食の安全・安心そして安定ー」

松井博和(北海道大学大学院農学研究院長)

第II部 パネルディスカッション「人類生存基盤のための科学・技術」

コーディネータ：伴戸久徳(北海道大学大学院農学研究院副研究院長)

パネリスト：西澤直子、生源寺真一、倉田のり、渡部終五、松井博和



松井博和農学研究院長の講演



約180名の参加者でほぼ満席となった農学部大講堂

法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座 「東アジアのなかの北海道」が終了

法学研究科及び附属高等法政教育研究センターでは、7月26日から8月23日までの毎週木曜日（8月16日を除く）、全4回にわたって、公開講座「東アジアのなかの北海道」を開講し、定員の50名を上回る60名の受講生を得ました。

地方が東京を経由せず、直接、国際社会とつながる時代が到来し、国際社会とのヒトやモノのダイレクトな太い流通網をどれだけ築けるかは、地域の発展のかぎを握る要素ともなっています。北海道には豊かな自然環境と国際競争力のある農水産業があり、それらを活かした国際戦略をいかに展開するかが問われています。

北海道にとってとりわけ重要な意味をもつパートナーは目下のところ中国、台湾、韓国などの東アジアの諸地域です。実際、これらの地域では近年、大変な北海道ブームが起きており、多くの観光客が押し寄せています。札幌

をはじめ各地の観光地で中国語やハンガルの看板や標識が目立ち始めています。

本講義では、東アジアとかかわりの深い4名の研究者、実務家を講師とし、東アジアから北海道がどう見えているかを語っていただき、東アジアの人々が北海道にどんな視線を送っているかという角度から北海道の国際化戦略を展望しました。

東アジア各国と北海道や本学との意外な歴史的つながり、各国における北海道に対するイメージの変遷など、東



講義風景（会場：社会科学総合教育研究棟W409）

アジアと北海道の「今」を伝える講義に、受講生も熱心に聞き入り、休憩時間中も講師に質問する様子も見られるなど、好評のうちに全日程を終えることができました。

なお、最終講義の終了後には閉講式が行われ、鈴木 賢高等法政教育研究センター長から所定の回数（3回以上）を受講した52名に修了証書が授与されました。

（法学研究科・法学部）



台湾と北海道との歴史について語る、徐 瑞湖氏

情報法政策学研究センターでサマーセミナー 「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐる—」を開催

情報法政策学研究センターでは、8月18日（土）から21日（火）までの4日間、人文・社会科学総合教育研究棟において、サマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐる—」を開催しました。

サマーセミナーは、本センターが日本弁理士会から弁理士の継続研修のための外部研修機関としての認定を受けて、平成21年度から毎年度開催しているものです。受講者は、知的財産事件に携わる実務家（弁理士、弁護士、企業の知的財産部員等）ばかりではなく、大学の教員及び大学院学生など幅広い分野にわたり120名を超えました。

第4回目となる本年度は、本センター兼務教員の田村善之教授、吉田広志准教授、また、外部招聘講師の知的

財産高等裁判所 高部真規子判事、新橋綜合法律事務所 川田 篤弁護士・弁理士により、特許法に関する実務的課題について、数々の重要裁判例を踏まえてわかりやすい講義が行われました。受講者は熱心に受講するとともに、各講師は、講義の最後の質疑応答で現実に即した様々な質問に対し、丁寧に答えていました。

本セミナーの初日終了後、早速一部のブログやツイッターで受講者から本センターでの研修中の模様や講義を受けた感想が投稿されており、本年度のサマーセミナーも多くの温かい反響をいただき、盛会裡に終了しました。

（情報法政策学研究センター）



サマーセミナー初日の様子



講演する川田弁護士

公共政策大学院が地方議員向けサマースクールを開催 —地方議会改革をテーマに—



サマースクール第5期生の集合写真

公共政策大学院（公共政策学連携研究部・公共政策学教育部）では、8月2日（木）・3日（金）の2日間、地方議員向けのサマースクールを開催しました。

このスクールは、地方分権が本格化する中、自治立法権の担い手としてその役割がますます重要となっている地方議会の活性化に寄与することを目的に、大学・大学院の取組みとしては全国初の試みとして、平成20年にスタートしたものです。第5回目となる本年は、道議、市議、町議ら40名の参加を得て実施しました。

スクールでは、1日目に、当院の山崎幹根教授から「これからの地方議会改革」について、また、外部講師として、前三重県議会事務局次長 高沖秀宣氏より「地方議会改革の動向と課題—事務局側からの視点」について、更に、北海道福島町議会議長 溝部幸基

氏から「議会基本条例制定のピフォー・アフター」と題して、それぞれ講義が行われた後、当院の大学院生の協力の下、NPO法人公共政策研究所が今年度実施した道内地方議会へのアンケート調査結果（速報値）が報告されました。2日目には、6つのグループに分かれ、分科会形式での情報・意見交換、全体の討論を行いました。

分科会及び全体の討論では、「地方議会改革・活性化の現状と課題」というテーマで議論が行われ、具体的には、①住民参加による地域課題の発見と共有（議会や委員会等主催の住民との対話の場ほか）、②課題を踏まえた議会内の討議と合意形成（議員間の自由討議、議会事務局体制の充実ほか）、③行政（執行部）と議会の課題共有と討議（通年議会、一問一答方式、反問、

政策討論の場の充実ほか）、④住民への説明（議会情報の公開・提供の充実、議会や委員会等主催の議会報告会ほか）という4つの検討項目に関して、熱心な討論が行われました。

実施後のアンケートでも高い評価をいただき、地方議員の間で、受講者同士がともに学び、情報交換し、議論することができる当スクールのような場が切望されている様子が今回も強くうかがえました。

今回のサマースクールをひとつの契機として、受講者同士がネットワークを形成し、今後も情報交換をしながら同志を増やし、各地域で議会の活性化や地域の振興に取り組んでいかれることを期待したいと思います。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）

経済学研究科 地域経済・経営ネットワーク研究センターが、公開ワークショップ「制度生態系アプローチによる経済政策論の展開」を共催

経済学研究科 地域経済・経営ネットワーク研究センターは、8月6日（月）午後1時から6時に百年記念会館大会議室で開催された公開ワークショップ「制度生態系アプローチによる経済政策論の展開」を共催しました。これは、経済学研究科 西部 忠教授（地域経済・経営ネットワーク研究センター研究員）が研究代表者である文部科学省科学研究費基盤研究（B）「制度生態系アプローチによる経済政策論の研究：進化主義的制度設計と地域ドック」により開催したものです。

本公開ワークショップでは、共同研究グループが以下の2つの報告を行いました。

A) 「制度生態系と進化主義的制度設計：貨幣制度生態系と貨幣意識の事例研究」西部 忠、橋本 敬（北陸先

端科学技術大学院大学知識科学研究科教授）、小林重人（同助教）、三上真寛（経済学研究科専門研究員）

B) 「コミュニティ・ドック*：その概念・方法論と地域通貨を活用した事例研究」西部 忠、草郷孝好（関西大学社会学部教授）、吉地 望（旭川大学経済学部教授、トポロジー理工学教育研究センター招へい教員（客員准教授））、栗田健一（横須賀市政策推進部都市政策研究所、慶應義塾大学SFC研究所上席所員（訪問））、吉田昌幸（上越教育大学大学院学校教育研究科講師）、宮崎義久（小樽商科大学商学部学術研究員（地域研究会））

その後、町野和夫（経済学研究科教授、地域経済・経営ネットワーク研究センター長）、瀧澤弘和（中央大学経済学部教授）、橋本 努（経済学研究

科教授、地域経済・経営ネットワーク研究センター研究員）、澤邊紀生（京都大学大学院経済学研究科教授）の4氏が報告について討論を行い、最後にフロアを含む全体討論を行いました。

進化経済学の視点に基づく制度生態系の概念や、政策論としての進化主義的制度設計やコミュニティ・ドックについて活発な議論が交わされました。

*コミュニティ・ドック

研究者が行う地域経済社会の総合診断情報を参照しながら、住民、企業、行政等からなるコミュニティが気づきや自己評価を通じて自らの価値観や地域の現状を自発的に変えていくという総合的政策手法。

（経済学研究科・経済学部）



報告する草郷関西大学社会学部教授（右奥）



フロアを含む全体討論

獣医学部で北大畜大共同獣医学課程・夏期集中授業 「農畜産演習」「帯広基礎獣医学演習」を実施



学生77名と両大学代表教職員による記念撮影

獣医学部では、平成24年度入学者から国際水準の獣医学教育を実施するため、帯広畜産大学と共同獣医学課程を編成し、北海道というフィールドを生かした実践的かつ先進的な獣医学教育を行います。この度、北海道大学・帯広畜産大学共同獣医学課程の一環として、1年生（北大獣医学部進学予定者37名・畜大獣医学課程40名、計77名）を対象に、最初の提供科目である「農畜産演習」及び「帯広基礎獣医学演習」を8月20日（月）～25日（土）に帯広畜産大学で実施しました。

獣医学導入科目群に属するこれらの科目は、1) 獣医学の学体系について理解し、教室・教員の教育研究分野を包括的に知るにより、6年間の獣医学課程で学ぶ獣医学の全体像を把握する、2) 農畜産技術の一端を実際に体験し、農畜産への幅広い興味や問題意識を育て、「農業、畜産の基本は、生き物を大切に育て、それが犠牲になり、私たち人間の食料となっていること」を学ぶために開講・実施されました。

本開講は、本学の第2期中期目標にある「大学の教育研究等の質の向上に関する目標」を達成するべく、「獣医学における学士課程教育を充実させるため、帯広畜産大学との共同教育課程を実施する。」という中期計画を具現

化したものであり、我が国で初めて学部レベルの共同教育課程をスタートさせた記念すべき授業となりました。

従来から、本学獣医学部は人獣共通感染症やライフサイエンス研究、生態系保全や小動物臨床を重点に、また帯広畜産大学は産業動物診療、生産獣医療や獣医公衆衛生学を重点に教育研究を行ってきました。今や、獣医学は様々な社会的要請、例えば食の安全・安心の確保、動物由来感染症の拡大防止、飼育動物の疾病の多様化や診断・予防・治療技術の高度化、動物愛護や野生動物保護管理など、多様な事柄に対応しなければなりません。このため、両大学がそれぞれ有する優れた教育資源を結集して、これまで一大学だけでは成しえなかった教育課程を編成し、いくつかの講義科目は北大教員が帯畜大で教授し、帯畜大教員が北大で教授します。また、今回のように学生が移動する演習や実習、およびITを用いた双方向遠隔授業も始まります。

今回の演習では、学生は獣医学の学体系の構築や実学としての重要性を十分に学んだものと確信していますが、両大学の教職員サイドからは初めての試みでもあり、時空間的及び経済的な面での不安を抱えての出発となりました。学生アンケートでは、「獣医学に含まれる幅広い学問の概要について学



帯広畜産大学 長澤秀行学長による開講挨拶



本学獣医学部 伊藤茂男学部長による開講挨拶

ぶことができ良かった」、「実際にブタやウシに触れながら行う実習は初めてだったのでどれも新鮮だった。命を犠牲にすることについて改めて考え直す貴重な機会を与えてくれました」などの声が聞かれ、獣医学導入教育として成功であったことがうかがえます。一方で、「宿泊施設から大学までの移手段として自転車がいい」、「宿泊施設の場所や設備を改善してほしい」といった、本来共同教育にあるべきインフラ整備が不十分であった点について、多くの学生からの指摘がありました。また、演習内容について「詰め込み過ぎている」、「高度過ぎる」、「時間的な余裕が欲しい」など次年度に向けて改善すべき点が多数あげられました。

以上、ここに共同獣医学課程の夏期集中授業が有意義であったこと、並びに次年度に向けて具体的に改善すべきことを報告するとともに、総合教育部所属の学生たちに学部専門教育を行うことを容認いただきました関係各位に深謝申し上げます。

(獣医学研究科・獣医学部)

水産科学院で第2回国際サマーコースを開催



受講生の様子



グループワークの様子

水産科学院では、8月19日（日）から24日（金）までの間、本学外国人・日本人大学院生を主な対象として、第2回国際サマーコースを開催しました。同コースは、水産分野におけるサステナビリティ（持続可能性）をテーマとして掲げ、オールイングリッシュによる講義・グループワークを提供するものです。

講師には本学教員に加え、岩手大学三陸復興推進機構 阿部周一特任教授、東京大学大学院農学生命科学研究科 黒倉 壽教授及びタイ国カセサート大学 クンワン ジャンタラショー

ト教授を招き、受講生として、大学間交流協定を締結している釜慶大学校（韓国）及び上海海洋大学（中国）の大学院生3名を含む24名（うち日本人学生4名）が参加しました。

また、同コース中には研修旅行（1泊2日）として、奥尻島を訪問し、津波被害に遭遇・対応された方々から、当時及び現在の状況と復旧・復興における課題等を学びました。特に、奥尻消防署職員の講話、並びに被災した青苗地区及び津波館への訪問は、教員及び受講生にとって貴重な体験となりました。

最終日のグループプレゼンテーションを終えると、受講生に安堵の表情が浮かび、フェアウェルパーティーでは各国の学生が入り交じり、1週間のコースを振り返って賑やかに意見交換をしていました。

同コースは、水産科学院の中期目標・中期計画に基づき、平成23年度から開催されているものであり、来年度以降も継続して実施する予定です。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



講義の様子



プレゼンテーションする受講生

ダイナミックな野外研究を満喫! 北方生物圏フィールド科学センターで「野外シンポジウム2012 ～森をしらべる～」を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、8月20日（月）から24日（金）までの4泊5日の日程で「野外シンポジウム2012 ～森をしらべる～」を開催しました。野外シンポジウムは、本センターが管理する広大な森林や溪流、湖沼、湿原などを巡りながら、森林研究の方法や成果を現場で紹介し、野外調査の一端を体験しながら、何がどこまで解明されたのか、そしてこれから何を明らかにする必要があるかについて考える場です。

15回目となる今年の野外シンポジウムは、苫小牧研究林の森を舞台に開催しました。シンポジウムには北大生を含む全国各地の国立15大学から森林研究に興味を持つ26名の学部学生が集まり、研究林スタッフと共同研究を進めている学外研究者を含む教員や大学院生から、森林研究の最新の成果や研究の進め方について学びました。今年は、最高気温が連日30度を超え、北海道らしからぬ猛暑が続く中でのフィールドワークとなりました。

プログラムの基本スタイルは、日中に野外の現場で行うフィールドセッションと、詳しい解説や質疑応答を中心とした夕食後の室内でのポスターセッションの2段構成になっています。「シカが森をうごかす ～生き物たちのつながり～」、「食うために、食われぬために ～両生類幼生、驚異の変身術～」、「下を向いて歩こう♪ ～森を支える土壌の秘密～」、「森の香りのそこから先 ～空と森の意外なつながり～」など、ユニークで印象的なタ

イトルがつけられた11のテーマ別セッションが用意され、学部学生たちは研究現場の環境やデータの質感を確かめながら、初めてのフィールドワークに果敢に取り組みました。

野外でのセッションでは、キャノピークレーンに乗って鳥や虫の目線で空中からの林冠観察や、ヘルメットと安全ベルトを身につけて足場タワー（通称ジャングルジム）に登り、樹木の最上部の葉っぱを採取して形質や食害度の測定、落ち葉や土壌をかき分けてミミズや歩行性昆虫の捕獲調査、胴長を着用して池に入って両生類の捕獲調査など、本学研究林ならではのダイナミックな野外調査を存分に楽しみました。

夜のポスターセッションでは、現場で経験した共有の感覚をベースに掘り下げた議論を行いました。時間を惜しむように活発な質疑応答が繰り広げられ、研究の楽しさや難しさのほか、研究者たちの苦労話や試行錯誤の裏話などを聞く良い機会となり、毎日夜遅くまで楽しい交流の時間が続きました。

このほかにも、早朝の森へ出かけて野鳥や植物の観察や、川の源流に出かけて森と川のつながりを実感するなど盛りだくさんのメニューが用意され、雄大な自然を対象とした野外研究の楽しさを満喫しました。

全てのセッション終了後に行われた参加学生による模擬セッションは、北大らしくアンビシャスセッションと銘打ち、お気に入りのテーマを選び、研究を紹介する立場になって実験結果ま

でを予想して発表しました。短い準備時間にもかかわらず、学生たちの中でふくらんだ「森林研究」への思いが伝わる手作りポスターを前にした楽しい発表会となりました。

最終日のエクスカージョンでは苫小牧市郊外のウトナイ湖畔にある環境省野生鳥獣保護センターへ行き、レンジャーによる周辺の自然環境のモニタリングや鳥獣保護の活動などに関する講話を聞き、交通事故などによって保護収容された鳥獣の救護活動について説明を受けました。

参加した学生たちは「森の中でのセッションはとても気持ちが良かった」、「アンビシャスセッションが大変だったけれど、研究の進め方やプレゼンの工夫などがわかって楽しかった」、「大学の先生や大学院生の方と、とても近い状態で詳しく話を聞けたので良かったです」、「キャノピークレーンやジャングルジムに登って、森を上から眺めたことがとても印象的」、「とても楽しかった。もう一度参加したいと思いました」など、新鮮で濃密な5日間の感想を語ってくれました。森林研究の面白さを満喫した参加者の中から、大学院に進学して新しい研究テーマに取り組む学生が現れることを願いながら、今年の野外シンポジウムを終えました。事業の概要については、本センター森林圏ステーションのホームページ (<http://forest.fsc.hokudai.ac.jp/~exfor/fr/>) に掲載しています。

(北方生物圏フィールド科学センター)



ゴンドラに乗って森の中を空中散歩
鳥や虫はこんなふうには森を見ているのか!



池に入って両生類の捕獲体験
生き抜くための変身術にびっくり!



夕食後は室内で「ポスターセッション」
納得がいくまで徹底的に議論を深めた

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ 北方生物圏フィールド科学センターで「北海道の魚，まるごとリサーチ！」を開催



ウエットスーツで記念撮影

北方生物圏フィールド科学センター 白尻水産実験所(函館市白尻町)では、8月11日(土)・12日(日)に「北海道の魚，まるごとリサーチ！」を開催しました。これは、科学研究費補助金「海産魚で初めて見つかった半クローン集団の起源と維持に関する遺伝生態学的研究」(研究代表者：宗原弘幸)の成果によるものです。本学を目指す高校生と中学生9名が未来の北大生として参加し、大学で行う実習さながらに野外観察、標本採集、室内実験に取り組みました。

最初に、白尻実験所前浜の生物相の特徴とよく見られる生物の生態について、実験所に常駐する大学院生・学生が、「北大元気プロジェクト2012」で作成した『白尻，海の生き物図鑑』を使い、教えました。その知識を実践するためには、正しいシュノーケリング技術が必要です。講習の後には、実験所にある大きな水槽をプールに仕立てて練習を行いました。このように図鑑で目を慣らし、シュノーケリングのスキルをしっかりマスターした甲斐あって、翌日の海中観察の時間までには、参加者は海藻や岩の間に潜む生き物の探し方まで習得しました。

そのほか、地曳き網で魚類標本を集め、それらの種名を調べた後、DNAで確認する実験にも挑みました。遺伝子実験は、かなり高度な内容で、翌日まで続く実験でしたが、指導に当たっ

た大学院生・学生たちと楽しく会話しながら、全員がやり遂げました。

夕食前には、今回の目玉イベントである、知られざる白尻の味覚の王者、クロマグロ(市場名-ホンマグロ)を材料としたまるごとリサーチです。実験所前浜の定置網で漁獲され、3日間水温熟成させたクロマグロの登場に拍手喝采でした。氷漬けしたコンテナからクロマグロを取り出し、まずは全身の形態観察です。自分の手でクロマグロに触れる機会は、参加者だけでなく、今年度の実験所の大学院生・学生にとっても初めての経験でした。高速遊泳に見事に適応した流線型のボディ、背鰭や胸鰭を収納できる構造、冷たい海に適應するための腹部の脂肪(トロ)など、普段は目にする事ができない部分までじっくりと観察を行いました。最後は、肉質による味の違いを確かめるリサーチで、クロマグロの実習は終了しました。

日常の教育現場と比較すると、9名の参加者に対して12名の指導者が対応するなど、参加者側から見ると贅沢な実習です。しかし、教える側の大学院生・学生にも大変意義のあるフィールドワークです。中高生に教える過程で、自動の実験機器で行われている化学反応の原理を復習し、自然や生命の尊さを再認識し、さらには自らの研究意義をも問い質す、学生生活を総括する機会になるからです。



大学院生からシュノーケルの使い方を教わる参加者



「地曳き網でどんな魚が獲れたかな」



「捕った魚の種名を調べよう」



マグロの解体ショー

このように、教わる側にも教える側にも、それぞれの目標に向かう確かなモチベーションを提供し、本実習が無事終了しました。実習の夏が終わると、研究の秋となります。大学院生・学生たちの成長と活躍に期待しましょう。

(北方生物圏フィールド科学センター)

総合博物館で学生発案型・夏休みイベントを開催



「ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO！GO！」の様子

総合博物館では、夏休み期間に学生発案型のイベントを3件実施しました。イベントの運営は、大学院共通授業科目・理学院専門科目「博物館コミュニケーション特論Ⅰ-学生発案型プロジェクトの企画・実施・評価」(担当：総合博物館 湯浅万紀子准教授、藤田良助助教)の授業の一環として、大学院生15名が担当しました。この授業はミュージアムマイスターコースの社会体験型科目としても位置付けられているため、理学部3年生の1名も参加しました。

1つ目のイベントは、7月20日(金)に開催した「学生のための学生による博物館ナイトツアー」です。学生に博物館をもっと利用してほしいと考えて対象を北大生に限定し、博物館の利用経験が少ない学生にもアピールできる企画として、夜の博物館を舞台に受講生による展示解説ツアーを行いました。解説テーマは、「鈴木クロス・カッ

プリングってなにがすごい!?」、 「大学院生から見た海洋資源の価値」、 「北海道大学の『生物多様性』研究」です。受講生の専門性を活かし自らの経験を織り交ぜた解説は好評で、参加学生との質疑応答も活発に行われました。展示解説ツアー終了後には、学生の博物館利用を促進するための意見交換を懇談会形式で行いました。今後、受講生は参加学生6名から得た貴重な意見をもとに、博物館に学生を更に呼び込むための提案をまとめ、総合博物館へレポートとして提出します。

他2つのイベントは、8月4日(土)・5日(日)の週末に同時開催した「夏休み企画!ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO!GO!」と、「子ども向けガイドマップ『博物館ぐるぐるマップ~昆虫編』」です。いずれも夏休みに来館が増える小学生を対象に企画されました。DS企画は、

を用いて、古生物や岩石・鉱物の展示について30種類の解説を行う音声ガイドの配信を展示室で行いました。コンテンツは総合博物館教員の監修を受け、受講生が音声吹き込みました。この企画は「北大元気プロジェクト2012」に採択され、助成を受けました。ガイドマップ企画は、昆虫標本の展示室以外にも点在する昆虫関連の展示物を探しながら、博物館オリジナルの「はっけんカード(昆虫解説カード)」を集めて、参加者独自のガイドマップを作成する取り組みです。

テレビ局3社から取材を受け事前に報じられたこともあり、問い合わせが多く、当日は開館前からイベント参加希望者が並ぶほどでした。参加者は両日合わせて400名を超え、ガイドマップで館内を巡った後に、持参したDSや博物館で用意したDSを持って展示室で熱心に音声ガイドを聞く子ども達で常に展示室は賑わっていました。いずれの企画も受講生がゴール地点と定めた場所で子ども達から感想を集め、保護者にはアンケートを実施しました。現在、受講生は企画の評価に取り組んでおり、10月上旬に総合博物館の教職員に報告し、その成果と課題について議論する予定です。

学生の自由な発想による企画は、総合博物館の教職員会議で提案して了承を得た上で実施しています。内容は教員が監修し、授業の一環として、広報と評価も含めた運営を指導しています。1つの企画をグループワークによって実施・運営・評価することで、学生には様々なことを学んでほしいと願っています。そして、大学博物館である当館は、学生が活躍する博物館であることを多くの来館者にお伝えしていきたいと思います。

本授業の過程は、総合博物館ホームページで紹介しています。<http://www.museum.hokudai.ac.jp/highereducation/storytopic/13/>

(総合博物館)

総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催

総合博物館では平成16年より「パラタクソノミスト（準分類学者）養成講座」を開講しており、各講座修了者に「準分類学修了証」を発行しています。8月には下記の日程で魚類パラタクソノミスト養成講座（初級）を開催し、参加者は熱心に取り組んでいました。

魚類パラタクソノミスト養成講座（初級）

8月9日（木）・10日（金）の両日、総合博物館の河合俊郎助教と水産科学研究院の矢部 衛教授、今村 央准教授を講師に迎え、函館キャンパスにおいて開催しました。

1日目の午前は水産科学館において、館長の矢部先生による開講の挨拶、メンバーの紹介、イントロダクションが行われました。次に、実験棟の実験室に移動し、河合先生による魚類の多様性についての講義が行われました。この講義には学術的にも貴重なミツクリエナガチョウチンアンコウなどの液浸標本も用いられました。講義後は休憩をはさみ、河合先生より魚類の分類方法、測定方法の説明が行われました。休憩の後、受講生は一人1個体のカサゴ目魚類の標本の測定を行いました。

午後の講座では、引き続きカサゴ目

魚類の標本の測定を続けた後、測定によって得られた計数・計測値を基に各標本の種同定を行いました。受講生は各自が測定・同定を行った魚類標本のスケッチを行い、1日目の講義は終了しました。

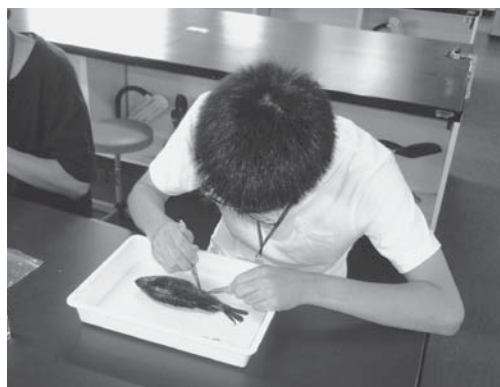
講座2日目は、今村先生による日本の魚類学研究史の授業から始まりました。授業後は、海洋生物学講座魚類体系学領域の見学が行われ、受講生は実際の魚体測定、解剖などの研究を熱心に見学していました。休憩をはさんだ後、河合先生による標本作成方法の指導がありました。この授業では透明二重染色標本なども資料として用いられ、午後に行われる標本作製作業のガイドラインが示されました。

午後の講座では、生鮮標本から標本作製する実習が行われました。標本

作製は解凍、種同定、肉片採取、鱗立て、写真撮影、タグ付、固定の7段階の作業から成りますが、受講生は種同定から鱗立てまでの作業を行いました。標本はフグ目、カサゴ目、コイ目などなじみのある分類群から、トゲウオ目など普段あまり目にするのな分類群にもおよび、受講生たちは一人当たり約10個体の標本作製しました。

最後に、今村先生より閉講の挨拶及び修了証が授与されました。本講座では受講者全員がパラタクソノミスト魚類（初級）の資格を得て、2日間の日程を終えました。

（総合博物館）



標本作製に取り組む受講生



修了式の様子

■ 寄稿

民間企業派遣研修報告 株式会社電通における研修を終えて

総務企画部広報課 本間 義将

はじめに

このたび、民間企業派遣研修生として平成23年4月から平成24年3月までの1年間、株式会社電通で“ソーシャル・コミュニケーション戦略プロデューサー塾”を受講し、修了いたしましたので、そのご報告をさせていただきます。

研修の概要

本学と株式会社電通北海道の連携協定に基づき、人材育成の観点から職員1名が派遣され、私が7人目でした。

私が参加した“ソーシャル・コミュニケーション戦略プロデューサー塾”は全国から、2市役所・1県の職員と、防衛省陸上自衛隊・海上自衛隊、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の方々に参加し“地域における様々な課題に対し、コミュニケーションにより課題解決能力を養成する”ことを目的に様々な講義や課題に取り組みました。

1年間のスケジュール

4月～5月：集合研修

1年間の研修にあたり必要となる広告の基本的な知識や、実際の事例など座学を中心に（時にはフィールドワークにより）体系的に学びました。また、演習課題が多数用意され、個人、チームでのプレゼンテーションを行うなど、吸収した知識を実践的にアウトプットする機会が多くありました。

6月～12月：OJT研修

6月中旬からはOJT研修として営業部署に配属され、トレーナーの方に同行する形で各種イベントやキャンペーンなどの打ち合わせ及びその現場に同行させていただきました。クライアントに対する姿勢（立ち振る舞い、考え方など）を、最前線で学ぶことができました。

1月～2月：希望局研修

1月からは3月の研修成果発表に向けて、自分で派遣元の課題を設定しその解決に向けて指導・助言等を受けるため、希望する部署へ配属されます。私は戦略・プランニングの部署を希望して配属となりました。課題のテーマを“外国人留学生の増加”に絞り、分析や戦略の立て方、施策アイデアについて助言・指導をいただきました。

3月：研修成果報告会

3月上旬にお世話になった電通社内の方々の前で本番の予行演習としての発表会を行い、3月23日（金）に本学百年記念会館にて研修成果発表を行い修了となりました。

研修を振り返って

研修中は、何回も何十回も自己紹介を行いました。自己紹介は基本的なことだと思っていましたが、自分がどんな人間であるかを手短かに説明し相手にわかってもらおうとすることが、どれだけ大変かを思い知りました。自己紹介ひとつを取っても、相手に“伝わる”ために、相手の目線に立ち、時には分析し戦略を立てて実行に移す、研修を通してこのような一連の流れを学ぶことが出来たと思っています。

3月の研修成果発表の企画書の作成では中々形にできず生む苦しみを味わいました。諦めず最後まで要領の悪い私に辛抱強くお付き合いしてくださいました、電通社員の皆様、研修生の皆様方には、本当に感謝の念に堪えません。電通社内での発表後に、ご指導いただいていた営業部長から褒めていただいた時は本当に嬉しく、大きな達成感がありました。

この1年間の研修で得た、課題に対する考え方や、人とのつながりの大切さを大事にし、本学の職務に還元していきたいと思っています。

最後になりますが、本研修の機会を与えてくださいました、株式会社電通、株式会社電通北海道及び本学関係者の皆様に深くお礼申し上げます。



研修生一同（浜離宮恩賜庭園にて）

■お知らせ

「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」 利用のご案内



大滝セミナーハウス外観

北海道地区国立大学大滝セミナーハウスは、北海道内の国立大学及び国立高等専門学校との学生と教職員が共同生活をしながら交流を図り、親睦を深めるとともに、学生の正課、課外活動を助長し、教育効果をより高めるために設けられた合宿研修施設です。そのため、本学の教職員・学生は、施設使用料・宿泊室使用料を負担することなく利用できます。

大滝セミナーハウスは、体育館、グラウンド、大研修室、中研修室、小研修室を備えており、職員研修、学部・学科の合宿研修、ゼミ合宿、体育館を利用したスポーツ合宿や親睦等、さまざまな目的で利用できます。ぜひ、積極的に活用してください。

(学務部学生支援課)

◆ 所在地

〒052-0317 北海道伊達市大滝区優徳町32

電話：0142-68-6155

◆ 施設の概要

● 収容人数／100名

● 駐車場／13台

| 室名 | 面積 | 収容可能人数 | 宿泊可能人数 | 備考(備品等) |
|---------|--------|--|--------|--|
| 大研修室 | 143㎡ | 100名 | | |
| 中研修室 | 59㎡ | 24名 | 16名 | 和室 |
| 小研修室 | 35㎡ | 16名 | 12名 | 和室 |
| 食堂 | 142㎡ | 96名 (最大100名) | | |
| 宿泊室(8室) | 各18㎡ | | 各8名 | 2段ベッド |
| 和室(2室) | 各11㎡ | | 各4名 | |
| ロビー | 118㎡ | | | |
| ホール | 31㎡ | | | |
| 大浴場 | 46㎡ | | | 温泉 |
| 小浴場 | 32㎡ | | | 温泉 |
| 体育館 | 860㎡ | 設備：バスケットボール2面、バレーボール(6人制2面、9人制1面)、バドミントン4面、硬式テニス1面、卓球台4台、ハンドボール・フットサルゴール | | テニス用具、バドミントンセット、バスケットボール、卓球用具、バレーボール、野球・ソフトボール用具、サッカーボール |
| グラウンド | 約3200㎡ | 設備：サッカーゴール | | ※冬季使用不可 |



体育館



グラウンド



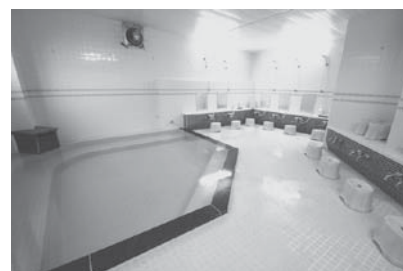
大研修室



小研修室



中庭



天然温泉の大浴場

◆ 使用料

施設使用料・宿泊室使用料：無料（ただし、学会等で使用する場合は、施設使用料は有料。）

食事料金：朝食600円，昼食600円，夕食1,100円

諸雑費：150円（1泊につき）

※食事料金・諸雑費は現地で支払うこと。

◆ 利用条件

4人以上で団体を構成し、かつ研修計画等を有するもの。

原則として、利用期間は、1泊2日以上とする。

◆ 利用申込方法

①事前に担当窓口で電話予約（利用日の1年前から受付）

②「利用許可申請書」を大滝セミナーハウスホームページからダウンロードし、利用開始日の20日前（土・日・祝日を除く）までに担当窓口へ提出。

③北海道内国立大学・国立高等専門学校以外の者が構成員に含まれている場合は、利用日の1週間前（土・日・祝日を除く）までにその宿泊室使用料金の支払い。

※申請内容に変更がある場合は、利用開始日の1週間前（土・日・祝日を除く）までに「利用変更申請書」を提出すること。

◆ 担当窓口（問合せ先・申込先）

学務部学生支援課課外活動支援担当（高等教育推進機構内③番窓口） 内線：7469

※詳細については、大滝セミナーハウスホームページをご覧ください。

<http://www.hokudai.ac.jp/gakusei/campus-life/facility/seminar.html>

本学トップページ>学生生活>学生関連施設>北海道地区国立大学大滝セミナーハウス

■同窓会との交流

愛媛エルム会 第4回総会・懇親会

愛媛県在住の同窓生は約200名を数えます。愛媛エルム会（会長：松村 境，S50獣医）では、毎年夏に総会・懇親会を、冬に幹事会・懇親会を開催しています。総会、幹事会ともに参加者は毎回ほぼ30～40名です。同会は、同窓生に限らず、元職員や論文博士を本学で授与された人など、本学に縁のある方々の懇親会への参加を歓迎しています。

今年の総会は8月17日（金）、大学

から三上 隆理事・副学長が出席し、道後山の手ホテルで開催されました。昨年から、総会の前に講演会が行われていますが、今年は愛媛大学南予水産研究センター教授の三浦 猛さん（S60水産）が、本学で行っていた研究である、試験管内で魚類の精原細胞から泳ぐ精子までを作るといふ、脊椎動物では世界で唯一の技術について講演しました。一般の方々には日頃接することの少ない内容でしたが、基礎生

物学での本学の底力を示す内容に会員たちは熱心に耳を傾けており、質疑も活発で、さながら学会のようでした。

懇親会では北大談義、最近の事情などで盛り上がり、最後は恒例の幹事長発声の前口上に続く「都ぞ弥生」の大合唱で幕を閉じました。

（総務企画部広報課）



講演の様子（愛媛大学 三浦教授）



円陣を組んで「都ぞ弥生」を歌うぞ！

■レクリエーション

平成24年度学内バレーボール大会の開催

7月27日（金）から8月21日（火）までの間、職員レクリエーション行事の一環として、恒例のバレーボール大会を第2体育館で開催しました。

今年度も昨年同様に若手職員の参加が多く、活気のある大会となりました。

なお、結果は以下のとおりです。昨年4位の病院が優勝を飾りました。

（職員排球部）

大会結果

- 優勝 病院
- 準優勝 工学系事務部B
- 第3位 北方生物圏フィールド科学センター
- 第4位 低温科学研究所



優勝：病院

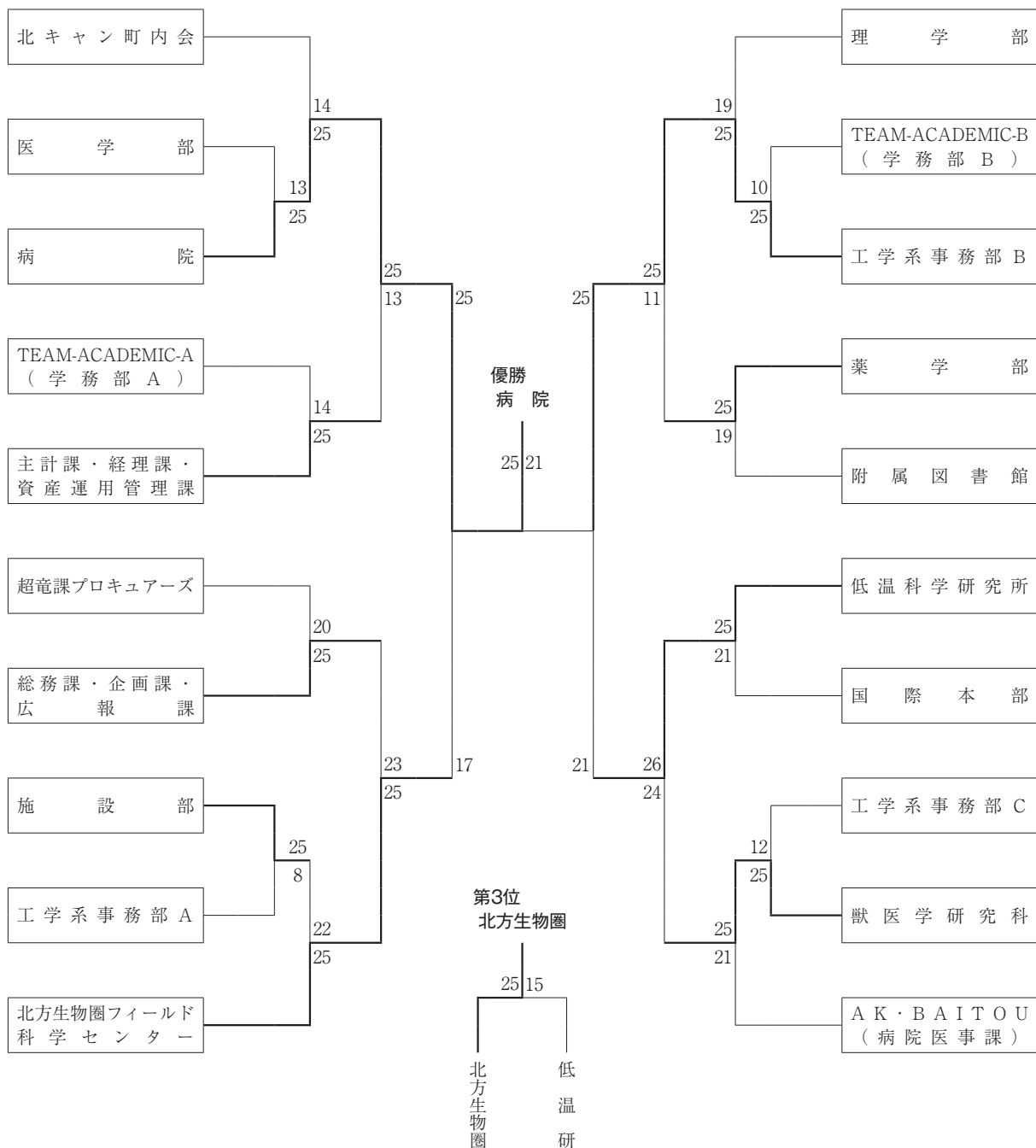


準優勝：工学系事務部B



第3位：北方生物圏フィールド科学センター

平成24年度学内バレーボール大会結果



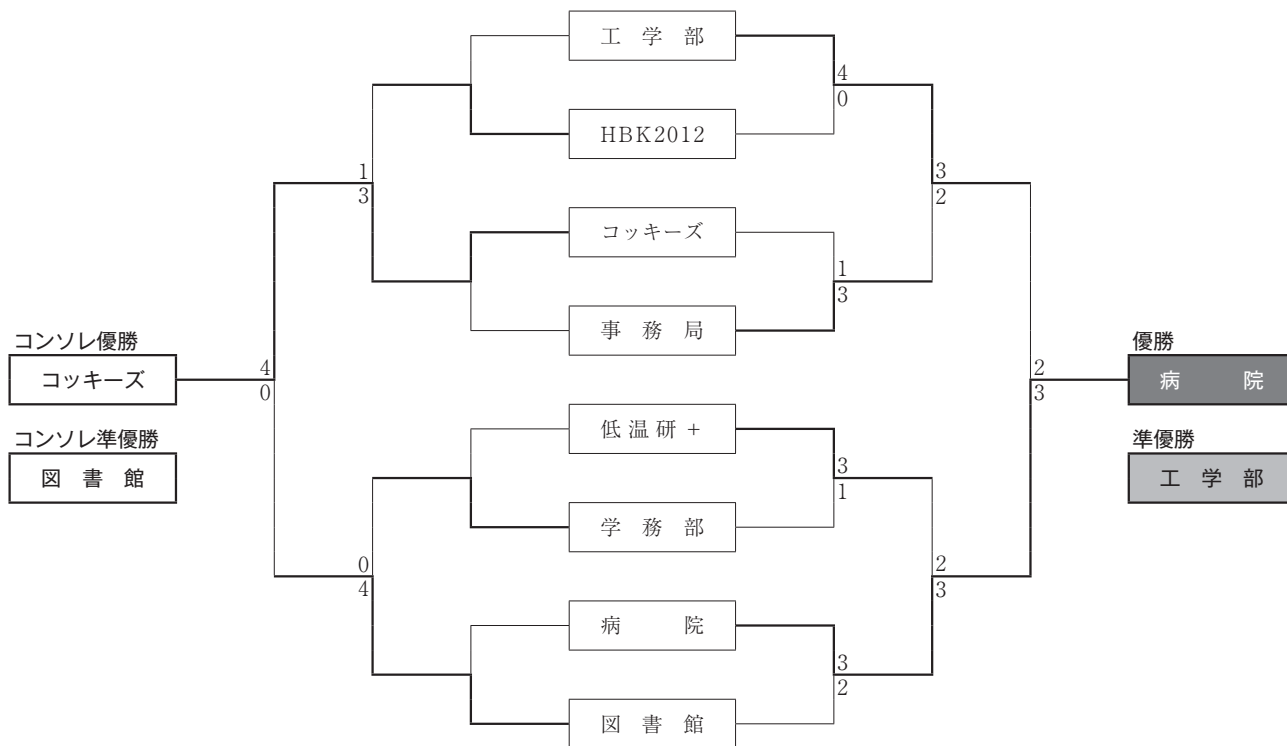
教職員テニス大会の開催

9月1日（土）に、構内各コートで職員硬式庭球同好会主催による学内部局対抗戦を行いました。
 北海道の9月とは思えぬ猛暑の中、8チーム総勢72名による熱戦が繰り広げられました。

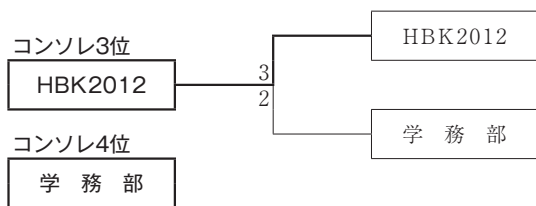
（職員硬式庭球同好会）

◆ コンソレーション

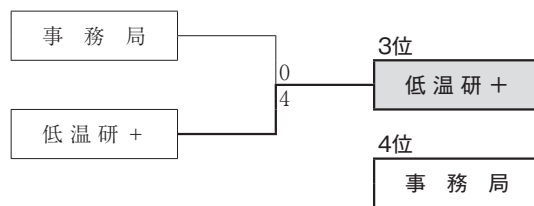
◇ 本 戦



* コンソレ3位決定戦（コンソレ1回戦の敗者）



* 3位決定戦（準決勝の敗者）



優勝 病院チーム



準優勝 工学部チーム

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成24年8月22日）

議案・国立大学法人北海道大学職員の給与の臨時特例に関する規程等の制定について
報告事項・理事の交代について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学職員の給与の臨時特例に関する規程

（平成24年9月1日海大達第100号）

運営費交付金減額の動向を踏まえ、職員の給与の臨時特例として基本給月額等を減額支給することについて、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員の特別の有給休暇に関する規程

（平成24年9月1日海大達第101号）

本年9月1日付けで施行予定の国立大学法人北海道大学職員の給与の臨時特例に関する規程の適用を受ける職員に、特別の有給休暇を付与することについて、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程

（平成24年8月24日海大達第102号）

北海道地区国立大学大滝セミナーハウスの所長の公印を作成することとしたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程

（平成24年9月4日海大達第103号）

資産運用管理課及び学生支援課に契約に関する権限を与えること、並びに本年4月1日付けで創成研究機構の事務を研究推進部外部資金戦略課が処理することになったことに伴い、所要の改正を行ったものです。（平成24年4月1日適用）

国立大学法人北海道大学固定資産管理規程の一部を改正する規程

（平成24年9月4日海大達第104号）

本年4月1日付けで、創成研究機構の事務を研究推進部外部資金戦略課が処理することになったことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。（平成24年4月1日適用）

国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析・加工受託規程の一部を改正する規程

（平成24年9月4日海大達第105号）

創成研究機構共用機器管理センターにおいて、材料分析又は加工に使用する設備の追加を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

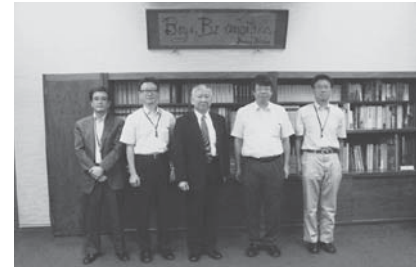
（平成24年9月4日海大達第106号）

本学のオープンファシリティについて、設備の追加を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

表敬訪問

国内

| 年月日 | 来訪者 |
|---------|--------------------------|
| 24.8.21 | 石狩湾新港管理組合 専任副管理者 佐々木 朗 氏 |

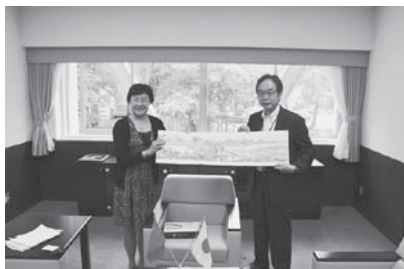


石狩湾新港管理組合 専任副管理者
佐々木 朗 氏 (右から2人目)

(総務企画部広報課)

海外

| 年月日 | 来訪者 | 来訪目的 |
|---------|----------------------------------|--------------------|
| 24.8.2 | 浙江大学 (中国) 王 玉芝 発展委員会副主席 | 両大学の交流に関する懇談 |
| 24.8.10 | JICA 黒川恒男 理事 | 本学とJICAの連携状況に関する懇談 |
| 24.8.21 | 清華大学 (中国) 顧 秉林 前学長 | 両大学の交流に関する懇談 |
| 24.8.22 | 在札幌オーストラリア領事館 Ian Brazier 領事 | 領事着任の挨拶 |
| 24.8.22 | 高麗大学校 (韓国) Byoung-Chul Kim 学長 | 両大学の交流に関する懇談 |
| 24.8.23 | パテイン大学 (ミャンマー) Nyunt Phay 学長 | 両大学の交流の可能性に関する懇談 |
| 24.8.27 | ブリティッシュ・カウンシル Jeff Streeter 駐日代表 | 本学の国際交流に関する懇談 |



浙江大学 王 玉芝 発展委員会副主席 (左側)



JICA 黒川恒男 理事 (下段右)



清華大学 顧 秉林 前学長 (中央)



在札幌オーストラリア領事館 Ian Brazier 領事(右側)



高麗大学校 Byoung-Chul Kim 学長
(左から5人目)



パテイン大学 Nyunt Phay 学長
(左から4人目)



ブリティッシュ・カウンシル
Jeff Streeter 駐日代表 (左から3人目)

(国際本部国際連携課)

■人事

平成24年8月13日付発令

| 新 職 名 (発令事項) | 氏 名 | 旧 職 名 (現職名) |
|--|---------------------------|---|
| 【技術職員】 水産学部附属練習船おしよろ丸機関員 水産学部附属練習船うしお丸操機手 北海道大学病院看護部看護師 | 新 藤 主 介 村 上 亨 本 馬 唯 | 水産学部附属練習船うしお丸機関員 水産学部附属練習船おしよろ丸操機手 北海道大学病院看護部看護助手 |

平成24年8月16日付発令

| 新 職 名 (発令事項) | 氏 名 | 旧 職 名 (現職名) |
|----------------------------------|---------|-------------|
| 【准教授】 (転出) 弘前大学大学院工学研究科准教授 | 藤 崎 和 弘 | 大学院工学研究院助教 |

平成24年8月31日付発令

| 新 職 名 (発令事項) | 氏 名 | 旧 職 名 (現職名) |
|----------------------------|--------------------|------------------------------------|
| 【役員】 (転出) 文部科学省大臣官房付 | 高 杉 重 夫 | 理事 (事務局長) |
| 【助教】 (辞職) | 氏 家 英 之 | 北海道大学病院助教 |
| 【係員】 (辞職) | 蔵 野 一 樹 | 薬学事務部 |
| 【技術職員】 (辞職) | 橋 本 あきら 大 野 麻 理 | 北海道大学病院薬剤部医薬品情報室長 北海道大学病院看護部看護師 |

平成24年9月1日付発令

| 新 職 名 (発令事項) | 氏 名 | 旧 職 名 (現職名) |
|---|---|--|
| 【役員】 理事 (事務局長) (期間：平成25年3月31日まで) | 村 田 直 樹 | 文部科学省大臣官房付 |
| 【教授】 大学院医学研究科教授 大学院教育学研究院教授 電子科学研究所教授 | 久 住 一 郎 横 井 敏 郎 太 田 裕 道 | 大学院医学研究科准教授 大学院教育学研究院准教授 名古屋大学大学院工学研究科准教授 |
| 【准教授】 大学院医学研究科准教授 大学院医学研究科准教授 大学院医学研究科准教授 大学院医学研究科准教授 (転出) 旭川医科大学准教授 | 井 上 猛 鬼 丸 力 也 木 下 一 郎 若 尾 宏 眞 山 博 幸 | 北海道大学病院講師 大学院医学研究科講師 大学院医学研究科講師 大学院医学研究科助教 電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジーセンター助教 |
| 【助教】 大学院工学研究院助教 北海道大学病院助教 | 武 田 量 夏 賀 健 | 採用 採用 |
| 【学術専門職】 国際本部学術専門職 | 内 田 治 子 | 採用 |
| 【技術職員】 施設部施設整備課 北海道大学病院薬剤部医薬品情報室長 北海道大学病院薬剤部薬務室長 北海道大学病院薬剤部無菌製剤室長 北海道大学病院薬剤部調剤室長 | 安孫子 倫 子 久保田 康 生 高 村 茂 生 原 田 幸 子 宮 本 剛 典 | 採用 北海道大学病院薬剤部無菌製剤室長 北海道大学病院薬剤部薬剤師 北海道大学病院薬剤部調剤室長 北海道大学病院薬剤部薬務室長 |
| 【特定専門職】 安全衛生本部特定専門職 | 平 井 克 美 | 採用 |

新任理事紹介

平成24年9月1日付

理事・事務局長に



むらた なおき
村田 直樹 氏

平成24年8月31日限りで高杉重夫理事・事務局長が転出され、その後任として村田直樹氏が発令されました。

任期は、平成25年3月31日までです。

略 歴

- 生年月日 昭和31年2月28日
- 昭和53年4月 文部省学術国際局ユネスコ国際部国際教育文化課
- 昭和56年6月 文部省学術国際局学術課
- 昭和57年4月 文部省学術国際局学術課学術振興係長
- 昭和58年7月 文部省大臣官房企画室教育計画係長
- 昭和59年7月 文部省大臣官房政策課教育計画係長
- 昭和59年8月 文部省大臣官房政策課専門職員
(兼) 総理府臨時教育審議会事務局総務課資料係長
- 昭和60年9月 文部省学術国際局国際企画課専門職員
- 昭和61年2月 外務省在イギリス日本国大使館二等書記官
- 昭和63年4月 外務省在イギリス日本国大使館一等書記官
- 平成元年5月 文化庁文化部芸術課課長補佐
- 平成3年6月 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課長
- 平成6年6月 文部省高等教育局大学課大学改革推進室長
- 平成9年7月 文部省高等教育局私学部私学助成課長
- 平成11年7月 文部省高等教育局私学部私学行政課長
- 平成13年4月 文化庁長官官房国際課長
- 平成14年8月 文部科学省大臣官房国際課長
- 平成16年7月 文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術総括官
- 平成17年4月 横浜国立大学事務局長
- 平成18年10月 文部科学省大臣官房審議官(高等教育局担当)
(独) 日本学術振興会理事
- 平成19年7月 文部科学省大臣官房付
- 平成22年7月 文部科学省大臣官房付
- 平成22年8月 外務省大臣官房広報文化交流部長
- 平成24年8月 文部科学省大臣官房付
- 平成24年8月 同上退職(役員出向)

新任教授紹介

平成24年9月1日付



医学研究科教授に

くすみ いちろう
久住 一郎 氏

医学専攻神経病態学講座/
精神医学分野

生年月日

昭和34年2月18日

最終学歴

北海道大学医学部医学科卒業(昭和59年3月)
博士(医学)(北海道大学)

専門分野

精神医学



教育学研究院教授に

よこい としろう
横井 敏郎 氏

教育学部門教育社会発展論
分野

生年月日

昭和37年5月17日

最終学歴

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学(平成4年3月)
文学修士(立命館大学)

専門分野

教育行政学



電子科学研究所教授に

おおた ひろみち
太田 裕道 氏

物質科学研究部門薄膜機能材
料研究分野

生年月日

昭和46年9月21日

最終学歴

東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了(平成13年9月)
博士(工学)(東京工業大学)

専門分野

薄膜機能材料



北海道大学 ホームカミングデー 2012

— おかえりなさい「エルムの森」のキャンパスへ! —



同窓生の皆さん、懐かしいキャンパスで、旧友や恩師と青春の思い出を振り返ってみませんか？
北大の「今」を体感できる、講演会や施設見学など様々なイベントをご用意してお待ちしております。

平成24年10月6日(土)

会場 北海道大学札幌キャンパス

クラーク会館、各学部施設 等

主催 北海道大学 共催 北海道大学連合同窓会

詳細はウェブサイトにて

北海道大学ホームカミングデー

検索

お問い合わせ

北海道大学総務企画部広報課
〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

011-706-2012 / 2153
home@general.hokudai.ac.jp

編集メモ

●前号でもご案内しておりますが、10月6日(土)札幌キャンパスにおいて、“おかえりなさい「エルムの森」のキャンパスへ”をキャッチフレーズに、「ホームカミングデー」を開催します。

☆「歓迎式典・記念講演会」では、佐伯 浩総長による本学の近況報告をはじめ、2010年ノーベル化学賞受賞の鈴木 章名誉教授による講演会、応援団による歓迎ステージ、参加者全員で肩を組んでの「都ぞ弥生」斉唱といったプログラムで同窓生の皆様を温かくお迎えします。

☆部局・同窓会主催行事では、講演会、懐かし講義、近況報告会、施設見学、ポスター展示など、多彩な催しを行います。

同窓生のほか、教職員の皆様のご参加もお待ちしています！

なお、ホームカミングデー特設サイトでは、同窓生の方々からのメッセージを掲載していますので、ぜひこちらもお覧ください。

<http://www.hokudai.ac.jp/home2012/index.html>



2011. 8. 9 大雪山小泉岳

北の息吹 65 リシリリンドウ (*Gentianella jamesii*)

国内に自生するリンドウの仲間は20種あるが、北海道に分布するのは11種であり、北海道にしかないものが3種ある。本種もその一つで、北海道、朝鮮半島と千島からサハリンにかけて自生する。道内では利尻山や大雪山系にあるが個体数が限られており、絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。本州にもあって数の多いミヤマリンドウに比べると、こちらの方が色合いがより深

く、副片が内側に折れる花の形がすっきりしていて、器量好しといえよう。写真で側面を見せる上方の花は一般的な形と色合いであるが、下方で開いた花は短い花弁状裂片と白い副片が個性的で、オヤオヤと思って撮影した。

前理事・副学長 岡田 尚武

北大時報 ⑨ No.702 平成24年9月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-4870 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp
北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/